＊＊＊七日目＊＊＊

火曜日の朝――。

「サーティエイトが何を考えているのかわからない……」

それが僕の、出会って一週間になる美少女への印象だった。

実を言えば、そろそろ、他の【マリオン】には慣れてきた。勿論、相手が美少女である以上、対面すれば、緊張する。相手の考えまではわからない。しかし、それは他の同世代女子でも似たようなものだ。

そして、慣れてきたのは【マリオン】も同じなのだろう。互いに丁寧語や謙譲語抜きで話す機会も増えてきた。２６（トゥエンティシックス）と５８（フィフティエイト）あたりは相変わらずトゲトゲしているが、逆に言えば、遠慮せずに話していると言えなくもない。ところが、

「私がどうかしましたか？」

「……」

と、サーティエイトだけは相変わらず敬語と無表情を崩さない。高品位の人形（マリオン）のような――という当初の印象を堅持している。

では、嫌われているのか？――と自問自答していると、サーティエイトがいきなり僕の手を握った。例のヴァイタルウェア越しに少女の温もりが伝わってくる。同時に、彼女のぴっちり衣装が指先まで覆ってくれている僥倖に感謝した。

さもなくば、僕の緊張による発汗が、サーティエイトを不快にさせたはずだ。

「歯を磨きましょう」

「え？」

「前々から気になっていったのです。あなたは汚い、そして、醜い」

「……そりゃあ、君らに比べればね」

「容姿（すがたかたち）は直せませんが、身だしなみは直せます。まずはその歯を磨きあげましょう」

……僕もこの一週間、歯磨きはこまめにやっていた。勿論、【彼女たち】への配慮である。しかし、それでもなお彼女には不満らしい。

だから、サーティエイトは僕を誘うのだと言う。

「さ、私と一緒に洗面所へ行きましょう」

「……嫌いな相手を一々ここまで構わないよな……？」

「何か言いましたか？」

「いや、わかったよ。今行くよ」

犬とか猫とかに懐かれるのはこんな感じなんだろうか？

……ちなみに僕は愛玩動物（ペット）が嫌いだ。

ホームステイの少女と恋に――という話はありがちではある。

それこそ、ボーイスカウト時代に海外へホームステイしに行った時、同世代の男子たち（当時中学生）は「やっぱパッキン巨乳の女が最高だぜ！」「ホームステイ先に期待だな！」と豪語していた。

しかし、豪語していただけだ。僕のホームステイ先も白人家庭だったし、幸か不幸か、その家庭には女子高生の娘がいたが、それだけだ（金髪だったかどうかも覚えていない）。一番の思い出と言えば……ああ、案内された居間に山盛りになったライチがあったので、挨拶の前につまみ食いをしてしまった事だ。冷静に考えれば、失礼だとわかるんだけど、ライチなんて、生まれて初めて目にしたものだから……。

――アレって、下手をすれば、窃盗だったよなあ。

……嫌な思い出が甦ってきたが、当然、その女子高生とは何もなかった。

結局、ホームステイ先での恋愛など、話としておもしろいだけだ。現実味には欠ける。

いや、これは僕が成長も性徴も遅い方だったからかもしれないが（余談だが、ジーンズショップで買い物をしたら、現地のお姉さんにクスクスと笑われていた。その時は理由がわからなかったが、今思えば、あそこは婦人店だった気がする）。

ううむ、しかし――と悩みながらも、僕は結局サーティエイトに洗面所へ連れられる。

すると隣の風呂場から、美少女が出て来た。

トゥエンティシックスだ。当然のように全裸である。

「ぎゃーーーーー！」

僕は同居開始から、何度目かになる叫び声をあげた。

「ふん」とトゥエンティシックスは虫けらでも見る目で僕を一瞥する。

「一々、五月蠅いのですが」とサーティエイトも横目で僕を非難する。

これは僕が男として見られていないのか？　それとも僕が信用されているのか？　……馬鹿にされているだけに思える。女子校のような環境に、男子が一人で放り込まれると、辛いらしい――という与太話が頭をよぎる。

「あ、あああああ、あのさ、僕はさ、健全な青少年なんだよっ」

「それは知っています。よくメッサリーナ姉さまの胸元に視線が行っていますから」

「……」

「それで何が言いたいわけ？」
「……裸で出歩かないで欲しい。せめてバスタオルで隠すぐらいして」
「何で？　この私の裸を見れるのよ？　嬉しくないの？」
「いや、嬉しくないわけではないけど……」
トゥエンティシックスは意味がわからないという顔だった。勿論、全裸のまま、堂々とした態度は崩さない。メッサリーナさんなら、蠱惑的にしなを作るだろう。この辺りは、トゥエンティシックスも子供っぽいと言えなくもない。
しかし、そうはいっても、その肉体は刺激的な女のものだ。少年のような髪型ですら、この場合は肌を隠さない事に一役買っている。
だから、はっきりと言う。
「僕の目の前でそういう事やられると、ムラムラと押し倒したくなる」
「はあ？」トゥエンティシックスは本気で呆れた容子だった。「押し倒すって？　私を？　もしかして、あなたごときがこの私を抱きたいって事？」
僕は勇気を出して頷いた。しかし――
「はっ、身の程知らずもいいところね」
トゥエンティシックスはそう嘲笑った。そして、乳房を揺らしながら大股で立ち去る。
――……これはあれかなあ？　『貴族』というやつかな？
身分制度が厳しい社会では、貴族の女性は奴隷の男性の前でも、平然と全裸になったという。つまり、貴族の女性にとって、奴隷の男性など、家畜の雄と同じ――羞恥の対象にならない。また、奴隷の男性も貴族の女性を恐れる故、手を出そうなどとは考えもしない。だから、入浴の際などに、貴族の女性は奴隷の男性に裸体を軽々しく晒す。
勿論、僕は奴隷ではない。むしろ、彼女たちに部屋を貸している家の子だ。
――けど、高貴な姫君が旅先で家を借りたとして、その家の息子を羞恥の対象とみなすかな？
勿論、彼女たちの場合、『肉体への自尊心は強い故に、肉体への羞恥心もない』というのもありそうだ。その点では運動競技者（アスリート）っぽい。
そこでふと、隣にいるマリオン――サーティエイトが気になった。
「ええと、サーティエイト、君もトゥエンティシックスと同じ意見？」
「それよりも歯を磨くべきです」
三つ編みお下げのサーティエイトは何だか早口だった。

＊＊＊

一時間目は国語の授業である。
今日は万葉集から、よみびとしらずな防人歌（さきもりのうた）。
――佐伎毛利尓　由久波多我世登　刀布比登乎　美流我登毛之佐　毛乃母比毛世受
「……うん。意味がわからないな」
漢文は好きだが、古典は苦手だった。

三時間目は体育の授業があった。
女子はバスケの試合をやっており、僕の視線はついそちらに向いてしまう。僕はあまり現実女性に関心のない方だったから、こんな経験は初めてだった。
原因は勿論、金髪碧眼の美少女サーティエイトにある。
――何といっても、危なっかしい。
とはいえ、これはある意味で杞憂だった。
サーティエイトははまず準備運動をそつなくこなした。その後、コートに立った時は、たしかに戸惑っていたようだ。彼女にパスを渡した生徒も、ゲームに馴染めないサーティエイトを慮ったように見えた。
しかし、サーティエイトはボールを受け取った後、頬を引き締めるとゴールに向かって、ドリブルを始める。素人目にも速いが、単調な動きだった。相手選手もゴール近くでその前に回り込む。が、サーティエイトはそこでいきなり急停止する。対する相手選手は急に止まれず、一瞬離れてしまう。勿論、それは一瞬の間に過ぎない。が、サーティエイトはそうやって相手選手を引き抜いた（プルアップした）一瞬の間に、真上に跳躍（ジャンプ）し、シュートを放つ。
その場は騒然となった。
（この時の僕は知らなかったが、こういうシュートをプルアップジャンパーといい、高い筋力と制体力が要求されるのだという）
「……まあ、これぐらいはやるだろうと思っていたよ」
僕は小声で独白した。
サーティエイトに限らず、【彼女たち】はあの基本運動とやらを欠かしていない。実際、準備運動もそつなくこなしていた。《マリオンプラン》の性質もある。基本的な身体機能で高校生平均を上回っている事は想像に難くない。
ところが、抜き去られた側の女子はサーティエイトに声をかける。
「ねえ。サーティエイトさん。もしかして、バスケ部だったとか？」

「いえ、記録で見た事はありますが、実際にやってみたのは今日が初めてです」
「そう。……あたし、中学の時はバスケ部だったんだけどねー。はっはっ」
最後の一文は乾いた声だった。本人は気軽に笑おうとしたのだろう。が、笑えなかった。そんな感じの笑い方だった。
「……前言撤回」
僕は再び小声で独白した。
――なるほど、僕は『身の程知らず』だな。トゥエンティシックスの言った通りだ。
たしかに【僕たち】と【彼女たち】の間にある能力差は明らかだった。
言うまでもなく、この差は遺伝子操作による先天的な要因だけではないだろう。むしろ、《マリオンプラン》の後天的な統合教育環境整備が大きな要因なはずだ。
――でも、結局は同じ事だ。
鈴木一朗（イチロー）という野球選手についての逸話を、僕はふと思い出す。
『彼は三歳の頃から野球を始めた。小学三年からは三百六十五日中、三百六十日は激しい練習に打ち込んだ。一週間で友達と遊べるのは、六時間以下だったという。その結果、小学校を卒業するまでには全国大会で優秀な成績を残し、絶対に自分はプロになる、自分はプロになれる、自分はプロになるべき人間だと夢を語っていた。
そして、彼は予言の通りにプロになった。まさに計画通り、予定通り、おめでとう。
教育と努力が見事に報われた存在だ。素晴らしい。
……逆に、十二の少年が「イチローみたいになりたい」と願っても、それは叶わないということなのだ。どれ程血を滲む程の努力を重ねても「もう手遅れです。残念でした～」ということなのだ』
この逸話の出典はよく知らない。たしか、ある若手起業家の発言だったと思う。だが、重要なのは出典ではない。この逸話が真実である事だ。特にあの元バスケ部の女子には。
「……」
サーティエイトがバスケ初体験というのは嘘ではないだろう。身体能力は文句なしだが、当初はどうも動きがぎこちなかった。しかし、時間経過と共に動きが大胆になっていく。試合中盤には大分コツを掴んだらしく、完全に主力選手となっていた。その上、終盤には一人でボールを持ち続ける事が申し訳なくなったのか、積極的にパスを回すようになる。
その様子を例の女子生徒はじっと見つめていた。
「……」
同じ【マリオン】でも、トゥエンティシックスを除く年長組にはやはり包容力がある。【僕たち】を露骨に馬鹿にしたりしない。メッサリーナさんなどはむしろ僕に優しいし、

ナインティーンやトゥエンティスリーも同じだ。
ただし、あの優しさに憐みがないとは言えない。
哀れな奴隷に対する主人の慈悲だ。
僕が『ムラムラと押し倒したくなる』と言った時、あのトゥエンティシックスは本気で呆れていた。
実際、押し倒そうとしても、出来るはずもないのだ。仮に一対一で殴り合っても、僕が勝てるとは思えない。それ位、【僕たち】と【彼女たち】の間には差がある。
「どうしました？　先程から黙り込んで」
「だから何で、僕の隣に座るの……！？」
試合終了後、サーティエイトは、他の生徒を無視し、当然のように僕の隣に座った。
しかも近い。もっと言えば、零距離だ。
「やや疲れたので、少し背を貸して下さい」
サーティエイトはそう言って、体育座りしている僕にのしかかってきたのだ。
仄かな温もり、柔らかな肉、滑らかな肌、わずかな汗の気配すらも芳しい。
……。
いやでもこれ、押しのける権利が僕にもあるよね？　しかし、一応本人が『疲れた』と言っているのに押しのけるのも無慈悲というか……そうですよ。本当は嬉しいですよっ。だけど、人前でこれをやるか？　うわ、皆こっち見てるって。普通に付きまとうだけなら、『同居人だから』でギリギリアウトだったけど、これは猛烈にアウトだって。第一、背を貸してもらうなら、女子に頼めばいいじゃないか。大人気なんだし。てか、今、「嫌ぁー。何でー」との誰か言ったよね？　まあ、気持ちはわかるっていうか、先生も困った顔しているし、やはり、押しのけるべきなんだけど、僕にも思春期男子の本能があるわけで……。
「？　トミヤマ・ナカミチ、動悸が激しいですね？」
「理由を考えてみろよ……！」
「……？」
サーティエイトは黙考し、返答する。
「……トゥエンティシックスの裸でも思い出していましたか？」
「「裸？」」
周囲の生徒はさらにざわついた。
僕はサーティエイトを睨みつけたが、彼女は無表情を崩さなかった。

＊＊＊七日目＋＊＊＊

学校では話を控えた僕だが、家に戻ってからは遠慮する必要もなかった。
「どういうつもりだよ？」
「何がです？」
「僕にベタベタし過ぎ。嫌ではないけど、不自然すぎる」
「説明はあったはずです。我々の社会経験が乏しい故です」
「ならなおさら、僕以外の人間関係も築くべきだ。そのための学校だろう？」
「まだ二日目ですよ。物事は段階的に進めるものです。無理を言わないで下さい」
サーティエイトは相変わらずの無表情……いや、いつも以上に硬質だった。
「もういいよ」
僕は僕で感情を抑えようとしていたが、成功したか否かはあやしいものだ。
「それと、今日は僕が先に風呂に入らせてもらうからね」
「構いませんよ。元々、我々はあなたの指示で先に入っていただけです。私は事務処理を行ってから入ります」
「ああ、是非そうしてくれ」

＊＊＊

「自意識過剰かなあ？」
湯船の中で僕は一人自嘲した。
僕は女性経験が乏しい。だから、サーティエイトに過剰反応しているのかもしれない。そう、元々、女の子とはあんなものかもしれない。サーティエイトは神奈川のみならず、他の男女にも数多言い寄られているが、そっけない態度を貫いている。だが、何故か僕にベタベタしてくる。けど、元々、女の子とはああいう生き物なのかも……。
「なわけねーだろ」
湯船の中で僕は一人ツッコミした。
そこで更衣室の扉が開く音がした。我が家は『廊下―更衣室―浴室』という平凡な作りなので、浴室にいる僕には更衣室にいる人影が曇り硝子越しに見える。
人影は少女のものだった。というか、今、この家には僕以外にはマリオンの美少女しかいない。だから、人影が少女なのは当然だが、彼女は更衣室で当然のように脱衣を始めた。
「いやいや、僕が入っているからね」
「はい。知っていますよ」

サーティエイトの声だった。
そして、彼女は全裸で浴室へ闖入してきた。
「ぎゃーーーー！」
僕は慌てて背を向けた。しかし、サーティエイトは「またその台詞ですか」と呟いて、平然とシャワーを浴び始める。僕の頭からは数瞬目にしたサーティエイトの白い肌が焼き付いて離れない。トゥエンティシックスと同じ堂々たる全裸だったか、サーティエイトはCカップというだけあって、全体の均整がとれて……。
「てか、僕が先に入るって言っただろう！」
「だから、先に入っていらっしゃるじゃないですか？」
「何で、君が入ってくるんだよ！」
「？　私は『事務処理を行ってから入ります』と言って、あなたも了承したはずですが？」
「あれはそう言う意味っ？」
「それよりも、湯船の隅に寄って下さい。私が入れません」
「二人で入る気っ？」
「何か問題が？」
サーティエイトはそう言って、湯船に割り込んできた。さして広くない湯船に無理矢理二人で入るわけだから、不可避的に肌が触れるというか、柔らかいというか……。
「ああ、もう！　僕は出る！」
僕は立ち上がって――サーティエイトの裸を見ないように必死で――浴室を脱出しようとした。ところが、その寸前で立ち止まる。
サーティエイトが僕の腕を握ったからだ。
「トゥエンティシックスの裸はよくて、私の裸はいけないのですか？」
「君は一体何を言っている……！？」
思わず振り向いた時、僕は美少女の全裸ではなく眼光に縛られる。
ただならぬ気配に、しばらくの沈黙が続き――そして、
「サーティエイト姉様ー。あたし達も入っていいですかー？」
更衣室から、そんな恐るべき声が届く。年少組マリオンの誰かだが、声だけでは特定し難い。ただ、『あたし達』ということは複数なわけで、どの道まずい。
だが、そんな僕の常識は、サーティエイトの発言で粉微塵になる。
「勿論です。今日はトミヤマ・ナカミチも一緒ですよ」
「はーい。今日は四人で洗いっこですね」

想像を絶する展開――しかも、サーティエイトは生真面目な顔で僕を問い質す。
「トミヤマ・ナカミチ、よろしいですね？」
「いいわけないだろ……！」
僕はそう言って、彼女の手をふりほどいた。

＊＊＊

「……というわけなんです」
僕は自室でサーティエイトの事を説明した。相手は勿論メッサリーナさんだ。
相談があるので、来ていただけませんか？――と伝えると、メッサリーナさんは何かを察したらしい。あっさり僕の部屋にやってきた。そもそも、メッサリーナさん自身、僕に丸投げしていたのは最初の五日間だけだという。【彼女たち】が不特定多数と接触する学校生活に入ってからは不測の事態に備えていたらしい。
それでも、最初はメッサリーナさんもケラケラ笑っていた。だが、僕の話を聞いているうちに表情を引き締めつつあった。
「サーティエイトが何を考えているのかわかりません。いや、僕は嬉しいですよ。何度も言いますが、あんな素敵な女の子に付き纏われるのですから。でも、理由がわからない事には……どうすればいいのか……」
メッサリーナさんは大きくため息をつき、その金髪をくしゃくしゃとする。
「そりゃ、多分、恋心ですね。参ったな。こりゃ面倒だわ……」
「え？」
それは僕がずっと『思い上がるな愚か者』と自身に言い聞かせ続けた答えだった。
「そして、リア充爆発しろ」
「ちょ、ちょっと待ってください。何故です？」
「何故って、そんなの決まっていますよ。可愛い可愛い妹分を他の男に取られれば、焼きもちぐらい焼きますよ。だから、リア充爆発しろ――おかしいですか？」
「……話を整理しましょう」僕は混乱を避けるために言った。「それはつまり……サーティエイトが僕に恋愛感情を抱いていると言いたいのですか？」
「はい。この調子だと、サーティエイト以外の【彼女たち】も、君に恋愛感情を抱くかもしれません」
「……な、何故です？」
僕は同じ言葉を繰り返した。

「惚れた晴れたを理屈で説明するのは難しいですよ」
「いやでも、おかしいですよ」
僕は『ありえない』と言い聞かせ続けてきた理由を陳列した。メッサリーナさんは一々頷く。「まったくもって、君の言う通りです。君はサーティエイトに好かれる程の男性では断じてありません」と納得してくれたようだ（畜生）。そして――。
「個人的に不愉快な仮説ならありますけどねえ」
「聞かせて下さい」
「あくまでも仮説ですが――《刷り込み（インプリンティング）》です」
「……生まれて初めて見た相手を親と認識するっていうアレですか？」
「はい。それと相同ではありませんが、相似の現象ですね」
「鳥じゃあるまいし……サーティエイトは人間でしょう？」
だから、相同ではなく、相似ということなのだろう。が、それでも困惑は避けられない。
「遺伝的に従順さを決定づけられている上、純粋培養に近い環境で育った我々マリオンは、端的に言って惚れっぽい。さらにその惚れた相手にすべてを捧げ尽くす傾向がある――という仮説があるのです」
「……」
「補足しておくと、いわゆる【ウィリアムズ症候群】とかでありません。これは確認済みです。何しろ、ドクターはパーフェクトベビー願望の権化ですからね。その手の同定済み遺伝病は神経質に排除なされました」
ちなみに【ウィリアムズ症候群】とは７番染色体上の遺伝子欠失に由来する稀な疾患で、心臓疾患や発達障害を伴うらしい。心臓疾患だけでも致命的だが、発達障害も特徴的で、彼らは平たく言うと『他者を疑わない』『万人と仲良くなろうとする』という。それこそ、幼児でもすぐに覚える『見知らぬ人についていかない』という生存戦略を獲得できない。……当然、社会的にも致命的である。
繰り返すが、マリオンたちの《刷り込み（インプリンティング）》疑惑は【ウィリアムズ症候群】とは明らかに別種だ。しかし、共通する要素もある。だから、メッサリーナさんは例に挙げたのだろう。
好意を抱くに値しない人間に好意を抱く――その点において、この《刷り込み（インプリンティング）》疑惑は【ウィリアムズ症候群】と同じく、危険なのだ。
「……それが仮説なのは遺伝子と従順さの因果関係が曖昧だからですか？　いえそれとも、教育環境との因果関係が？　あるいはその両方？」
「さらに、そもそも『これは【マリオン】に特有の傾向と言えるのか？』という点もです」

メッサリーナさんは苛立った声だった。

「世の中に色んな薬がありますけど、『惚れ薬』ってありませんよね。根本的に『惚れる』＝恋愛感情の定義ですら曖昧です。仮に明確に定義できたとしても、その電気化学状態の定義が複雑怪奇である事は想像に難くなく、薬理的に再現するのはさらに難しいでしょう。幾分、単純と思われる『媚薬』についても同じ事です」

――たしかに……。

第一、【彼女たち】の感情がそこまで分化しているかが怪しいと思う。異性への恋愛感情と家族への親近感情がごっちゃになっている節がある。いや、僕もちゃんとした恋なんて、未体験だけど。

「恋愛感情も性的欲求も、元々その位入り組んだスパゲッティみたいなコードです。なら、何かの拍子に誤作動してもおかしくないでしょう？」

「たしかに、微視的にはその通りです。原理的には誤作動の可能性も常にあるでしょう」

僕は一応認めた。「けれど、世の中には厳然とモテる男もいれば、モテない男もいますよね？　これはつまり誤作動はあり得るものの、巨視的、現実的には誤作動の可能性は少ないという事では？」

「……」メッサリーナさんは黙り込んだ。

「ましてや、彼女たちなら、もっといい男といくらでも付き合えるでしょう？　それこそ、神奈川君の例がある」

僕はモテないが、それでも、近所の女児に懐かれたことはある。四つ歳下のその女児は小学校に入ると、真っ先に僕の教室へ押しかけ、小学生ながらに一悶着あったものだ。

たしかに今のサーティエイトの態度はあの女児に近い。

しかし、その女児も小学校に入った後は、僕に興味をなくしていった。当然の結果だ。身近にいた男子が僕だけだから、彼女も僕に興味を抱いたのだ。小学校で、僕以外の男子――大概が僕よりも魅力的な少年たち――を目にすれば、そちらに目移りするものだ。

だから、サーティエイトも高校で神奈川のようなより良質な男子と出会えば、そちらに目移りしてもよさそうなものだ。しかし、現実にはまったく目移りしていない。これでは《刷り込み（インプリンティング）》の疑惑も膨れ上がる。

メッサリーナさんはとうとう両手を上げる。

「……そうですね。その点、マスターは我々がいわゆる『家畜化遺伝子群（domestication）』の影響にある可能性を示唆しています」

「家畜化遺伝子群（domestication）……って、愛玩動物（ペット）にもよくあるっていうアレですか？」

これは前述のウィリアムズ症候群と違い、比較的広い意味を持った単語だ。それなりに

有名なので、僕も予備知識があった。

家畜化遺伝子群（domestication）とは狼を犬に、虎を猫に、猪を豚にしたとされる遺伝子の一群である。

もっと言えば、他者に対して従順になる遺伝子の一群だ。当然ながら、弱肉強食の自然環境で、こんな遺伝子群を持っていれば、文字通り、喰い物にされてしまう。

だから、突然変異でこの遺伝子群を獲得しても、その殆どは淘汰されたはずだ。

しかし、人間の存在がこの家畜化遺伝子群（domestication）の価値を一転させた。

普通の野生動物は家畜にできない。例えば、ウマは家畜にできるが、シマウマは家畜にできない。後者は何度も試みられたが駄目だった。ウマと違い、シマウマは家畜化遺伝子（domestication）群を持っていない。だから、凶暴で人間に懐かない――野生動物として、当然の性質の持ち主だからだ。

そして、ヒトがどんなに己を鍛えようとも、生身でシマウマには勝てない。

つまり、シマウマはほぼ無条件に人間を殺す意思と能力を兼ね備えている。となれば、共存が不可能なのは言うまでもない。

逆に、家畜化遺伝子群（domestication）の支配下にあるウマは非常に臆病だ。おまけに人間に懐き易い。

ウマの体格はシマウマと同じなので、ヒトなど蹄（ひづめ）の一振りで簡単に蹴り殺せる。なのに、ウマはヒトに服従したがる。これなら、共存も容易い――という事で、五千年以上前に、ウマは文字通り家畜化（domestication）されている。

その結果、シマウマは度々絶滅しかけているのに対し、ウマは人間と共に世界中で繁栄したというわけだ。

考えてみれば、サーティエイトの行動原理は家畜化遺伝子群（domestication）を髣髴とさせる。繰り返すが、ウマとヒトが喧嘩になれば、まず間違いなくウマが勝つ。なのに、ウマはヒトに従う。サーティエイトは僕を上回っている。なのに、彼女は僕に懐いている。

これはたしかに――と勘繰りつつも、訊ねる。

「……でも、家畜化遺伝子群（domestication）って、同定済みなんですか？　第一、あれは素人目にも多系統群だから……」

メッサリーナさんは「まさか。あくまでも仮説です」と肩をすくめる。

「あくまでも『遺伝子操作の結果、偶然、家畜化遺伝子群（domestication）が揃ってしまった』仮説だと？　意図的なものではないと？」

「まー、ドクターの性格を考えれば、意図的に私たちを家畜化（domestication）しようとしてもおかしくはないんですけど……」

メッサリーナさんはあっけらかんと言いながらも、否定する。

「技術的に無理だろうというのが、私とマスターの共通見解です。ウィリアムズ症候群と

違って、家畜化(domestication)現象はほぼ間違いなく、複数の遺伝子による相互作用が原因ですからね。そんなに簡単に同定できません。同定すらできないものを実際に使うというのはちょっとありえないでしょう？　とりわけ、ドクターも技術者としては保守的ですし」

まあ、そうだろうな――とは僕も思った。

コンピューターのプログラムと同様、単一のコードに由来する障害の特定はさほど難しくない。その障害を起こしている個体と、その障害が起きていない個体を集め、較べて、障害が起きている個体にのみ、共通するコード（の破損）を探せばいい。もし見つかれば、そこが原因になっている可能性が高い。あとは実際にその障害個体共通コードを意図的に（勿論動物実験で）作ればいい。その結果、同じ障害が起きれば、同定完了と言っていい。

が、こういうのは複数の相互作用となると、途端に、話がややこしくなるものだ。

「実際、家畜化(domestication)遺伝子群の同定はドクターですら、匙を投げつつあります。つまり、現行技術では絶望的という事です。そりゃそうですよ。仮に家畜化(domestication)遺伝子群が我々に実在しても、核遺伝子にあるとは限りませんもん。ミトコンドリアならともかく、共生細菌の方にあったりすると、もうお手上げです」

「そうですか……」

僕は残念なような、安心したような……不思議な感覚に襲われた。

「それに……私はむしろ逆なのではと考えています」

「逆？」

「ドクターはウィリアムズ症候群に限らず、疾患の原因となり得る遺伝子を取り除いて、我々を作成しました。その取り除かれた遺伝子には、いわゆる『親殺し』に繋がる『群れ秩序への反抗意識』遺伝子候補も含まれていました」

「……！」

メッサリーナさんは「ドクターはどこまでも自分に絶対服従な美少女を理想としていましたから」と微笑む。

「その結果、我々は群れ秩序へ極端に従順な性質を帯びるようになった。それこそ、精神的な『親殺し』が、むしろ必然とされる人間社会にあっても、例外的に『親』や『家族』といった群れ秩序への服従を貫く程に」

「それがマリオンプランにおける《刷り込み(インプリンティング)》の正体だと？」

「我々が《姉妹》間で異様に仲睦ましいのも、『群れ秩序への反抗意識』が極端に乏しい故ではなかろうかと愚考します」

「……」

「そんな渋い顔をしないでください。あくまでも仮説です。今、私は私なりの愚考をした

でしょう？　この時点で《刷り込み（インプリンティング）》対象であるはずのマスターに異見している訳です。《刷り込み（インプリンティング）》とやらの効力も怪しいものです」

「それはまあ……」

「加えて、《刷り込み（インプリンティング）》対象候補であるドクターやマスター、さらにお嬢様は、専門分野に違いはあっても、有能で優秀な方々です。家畜化（domestication）遺伝子群など持ちださなくても、惚れる理由は十分にあります」

「それは『僕』が反証になるじゃないですか。その三名については知りませんが、『僕』はどう考えたって、並み以下ですよ」

僕が眉を顰めていると、メッサリーナさんは目を伏せる。

「……私自身もドクターやマスター、お嬢様にベタ惚れですからね。……この想いを『不自然だ』と言われれば、腹が立つのです」

僕はサーティエイトの無表情を思い出した。

今考えれば、彼女が無表情を見せた時、僕は常に『不自然だ』と言っていた気がする。いや、今でも思っている。僕より神奈川に惚れるべき。僕に惚れるのは不自然だ――と。

それが彼女の怒りに触れていたのかもしれない。

「……でも、理不尽ですよ。人間が人間へ一方的に自分を捧げたいと思うなんて……いえ、これは恋愛感情そのものの問題なのかもしれません。ただ、こうも容易く惚れてしまうというのはおかしいです」

すると、メッサリーナさんは苦笑する。

「――富山君、それ、『あなたたち』にも同じことが言えるんですよ」

「……どういう意味です？」

「例えば、君、私の事、好きでしょう？」

「それは……！」

「いいんですよ。隠さなくっても。なんたって、私美人ですから。金髪碧眼ですから。Ｆカップのナイスバディですから」

メッサリーナさんは両腕を胸元で交差させ、その乳房を両手で強調するように握りしめ……しかし、まじめな声でいう。

「好きになって当然です。そもそもそういう風に作られたんですから――しかし、こうも容易く惚れてしまうというのはおかしいですか？」

「……」

「もしも我々が惚れやすいのなら、それはある種の均衡な気がしますね」

この時、僕は婉曲にフラれたのかもしれない。

「いずれにせよ、今の君と同じ懸念はカンパニーの方でも考慮されていました。例えば、【マリオン】が極端に反社会性的な人間に惚れてしまったら、それは明確に危険です」
「……【彼女たち】が僕のところに来たこと自体……」
「はい。検証実験の意味合いもありました。君の経歴は既に確認済みだったのも、仮称《刷り込み（インプリンティング）》発現の可能性を考慮しての故です。だから、『万が一、惚れても問題なさそう』という人選ではありました。……私自身は仮説には否定的だったんですけど……」
「……」
「とりあえず、報告には感謝します。やや面倒ですが、私の方で『対処』しますよ」

翌日、九人の美少女達は我が家から消えていた。

＊＊＊八日目＊＊＊

僕は思った以上に無感動な人間だったらしい。
朝、【マリオン】たちが一斉に消えていても
「これがメッサリーナさんの言っていた『対処』か……」
と、妙な納得をしてしまったのだ。

後から考えてみれば、この時、僕が取り乱さなかったのは矜持（プライド）の問題だったのだろう。一応、貸していた布団一式が綺麗に仕舞われている事は確認したが、それだけだ。元々、向こうが押し掛けてきただけなのだ。こちらが追いかける事はない。
そう考えて、僕は学校に行った。

＊＊＊

五時間目に、入学直後に行われた学力考査の結果が返ってきた。
一目して、腕が震える。
――また学年五位か……。
順位は中学の時と同じだ。
ただし、あの時は上から五番目だったのに対し、**今は下から、五番目である。**
三百二十人中、三百十六番。
――これが進学校の水準なんだ。わかっていたことだろう？

自分に必死に言い聞かせたが、しかし、学力差を痛感せざるを得ない。これでも、僕は常に学業優秀で通してきた。当然こんな順位は取った事がない。

ふと、親友の台詞が甦る。

――「お前には愚直さが欠けている」

手先は不器用だが、頭の要領がいい。公立中学の試験など、ろくに勉強せずに解けるのだろう。だが、そのせいで意識的に努力を継続する習慣が身についていない。そんな事で高校以降やっていけるのか？

中学の親友が滔々と語った後、僕が「何が言いたいの？」と問い返えすと、

――「……期末試験前日に遊びに来るな！」

彼はそう言って、僕を追い返したものだ。

――本当はこういう事が言いたかったんだろうなあ。

言っておくが、僕は中学時代から勉強はしていた。先生の話は真面目に聞いていたし、子煩悩な母が買い与える学習雑誌もちゃんと読んでいた。今だって教科書や資料集は暇な時によく読んでいる。そもそも、ライトノベルはあれで文系能力の向上に繋がるのだ。

が、それだけだ。親友のように試験前のこまめな復習をやろうとはしなかった。

それでも公立中学までは学年五位だった。それ位、あそこは低い学力水準だったのだ。実力のない人間も受け容れている以上、やむを得ない。逆に、この高校は試験を突破した人間だけが入れるのだから、競争は過酷になる。

わかっていたつもりだった。しかし、それはあくまでも『つもり』であって、やはり、僕はわかっていなかったのだ。

「ヨウジ、ホテルの予約はやっておいてくれたね？」

「ああ、一応な。つーかさ、何で今時電話予約なんだ？　大体、英語はそっちの方が得意だろ？」

「せっかくのロンドンなんだから、ブライトン・ピアは外せないよねー」

「話聞け。……いや、現地ではマジで頼むぞ。俺のＴＯＥＩＣスコアは知っているだろ？」

「大丈夫。私も海外で一人が怖いから誘ったんだし。ヨウジを置いて行ったりしないよ。……あー、その顔信用していないな」

リア充二人の羨ま妬ましい会話が耳に入ってくる。自慢かこの野郎という一連の流れ。とはいえ、内容は微妙に進学校らしい。

――……それはつまり、二人とも日常英会話はＯＫという事？　（てか、ロンドンなら、大英博物館だろう！）

いずれにせよ、僕には無理な芸当だ。ホームステイの時だって、受け入れ先が組織的に準備してくれたから、行けたのだ。二人のような純粋な私的旅行とは訳が違う。つまり、彼と彼女の英語力は僕を遥かに上回っている。

そして、中学の親友が言いたかったのはこういうことなのだ。親友も成績は良かった。僕に匹敵する程だった。しかし、試験前の勉強は欠かさなかった。そんな勉強しなくても成績いいのに――と思っていた当時の僕を殴りつけてやりたい。

親友が勉強していたのは試験対策ではない。前述の『意識的に努力を継続する習慣』を身に付けるためだ。公立中学の内容に限れば、大して勉強せずとも十分だ。しかし、高校以降はそうはいかない。僕がやっていた識意下の学習では不十分なのだ（さらに大学以降では『才能』の壁がある）。だから、『意識的に努力』する必要がある。そのために親友はそれを『継続する習慣』を身に付けようとしていたのだ。

「あるいはサーティエイトの生真面目さも……か」

そんなサーティエイトの不在は教室でも話題になった。

――「彼女来ていなんだって？」

――「ああ、やっぱりね」

――「あいつと釣り合うはずがないとは思っていたよ」

半ば、被害妄想なのだろう。サーティエイトは既に学校の有名人だが、まだ一日休んだだけだ。しかし、そんな声が僕にはたしかに聞こえた。

＊＊＊

それでも、食堂で金髪女子高生三人を見た時は一瞬期待した。

「ナインティーン先輩……！」

正確にはナインティーンとトゥエンティスリーとトゥエンティシックスだ。

思わず人目も憚らずに駆け寄る。

「よかった」僕はそう言ったが、後になってみれば、何が『よかった』のかはわからない。

「通学は継続なんですね？」

「……ええ」

「あの……サーティエイトは？」

僕が尋ねるとナインティーンとトゥエンティスリーが暗い顔で黙りこむ。

「何かあったんですか？」

するとトゥエンティシックスが呆れたように言う。

「わかってるでしょ。あなたのせいよ」
「シックス！」
同世代のトゥエンティスリーは窘める。が、トゥエンティシックスは悪びれない。
「何よ。本当の事でしょ。あーあ、あの優等生のサーティエイトが問題行動で『処分』を受けるなんて。とんだお笑い草だわ」
その『処分』という表現に僕の背筋が凍った。
「そういう訳だから、もう気安く話しかけないでね」
トゥエンティシックスはそう言って、立ち去る。
僕が残り二人のマリオンに視線を向けると、ナインティーンが沈痛な面持ちで言う。
「概ね、トゥエンティシックスの言う通りです」
「ナインティーン姉さままで……」とトゥエティスリー。
「言い方はともかく、トミヤマ・ナカミチの存在が原因になっているのは事実です。勿論、トミヤマ・ナカミチに責任はありません。ただし、我々もトミヤマ・ナカミチとの接触を避けるように指示を受けました」
僕はナインティーンの丁寧な説明に苛立った。そんな事より聞かねばならない事がある。
「サーティエイトは無事なんですよね？」
「当然です。あの娘に価値があるからこそ、この『処分』が必要になったのですから」
僕はほっと息をつく。
同時に自分がいかに冷静さを失っていたかに気付いた。たしかにその通りだ。サーティエイト――というよりも【マリオン】――には凄まじい価値がある。いくら量産されているとはいえ、あれだけの美少女を一人育てあげるのに必要な経費は半端なものではない。ならば、尊重されるのが道理だ。マリオンたちの貴族的な態度もその裏付けとなる。軽々しく『殺処分』などされるはずがない。むしろ、行動の制限こそあれ、丁重に扱われているとみるべきだろう。
そして、今ナインティーンが言った通り、だからこそ、僕と引き離す『処分』が必要になったのだ。――貴重な宝物を、下らない男に奪われないために。
「あ……、じゃあ、『気安く話しかけないで』『接触を避けるように』って」
「はい。《刷り込み（インプリンティング）》対策です」ナインティーンは申し訳なさそうだった。「メッサリーナ姉さまからも説明されたでしょうが、これまで《刷り込み（インプリンティング）》の実在は疑われていました。今でもそうです。我々の中で『発症』したと思われるのはサーティシックスのみですから」
「……とはいえ、一名でも実例が出た以上、不必要なリスクは回避すべき――と？」

「その通りです。逆に『発症』しなかった残り八名の学校生活については継続されます。どの道、最低限の社会性の獲得は不可欠ですから。ただ、『感染源』と思われるあなたとの接触はやはり好ましくないとの判断です」

彼女たちの言葉は理路整然としており、僕には返す言葉はなかった。

「こちらの都合ばかりで本当に申し訳ありません。ですが、サーティエイトのことを想うなら、我々の事は忘れてください」

＊＊＊

放課後、僕は指導室に呼び出された。

待っていたのは、大方の想像通り、教師ではなくメッサリーナさんだった。

「大体の事情は高校生組三人から聞いていますね？」

僕は黙って頷く。

「賢い君なら、この処置の妥当性もおわかりでしょうね？」

「本当に賢ければ、今、ここにいないのでしょうが……」僕はつい皮肉を言ってしまう。

「《刷り込み（インプリンティング）》の結果、サーティエイトが僕に異常な好意を抱いたのなら、僕と生活を共にさせておくわけにはいかない。……そういう事ですね？」

メッサリーナさんも黙って頷く。

なんて事はない。古典的な構図だ。高貴な姫君が卑近な奴隷に恋をしたら、周囲がやる事は一つだ。つまり、二人の間に『あやまち』が起きる前に引き離す。その奴隷が特段に有能ならともかく、僕は学年五位の無能さだ。高貴な姫君には相応しい相手がいる。

そして、それは僕ではない――そういうことだ。

「最初に渡した五十万円を覚えていらっしゃいますか？」

「ええ。……あれは……」

「はい。私も仄めかしましたし、あなたもお気づきでしょうが、最終試験でした。我々の可愛い可愛い妹を、安心して、任せられる男の子か否かのね」

どの道、《刷り込み（インプリンティング）》について検証する必要があったのだと言う。

さらにメッサリーナさんは再び札束を僕に渡す。

「追加報酬の五十万円です。……これは試験ではありませんよ。カンパニーからの純粋な感謝の証です」

手切れ金。そんな単語が容易に連想できた。

「それと、これは個人的な感謝の証です。大サービスですからね」

メッサリーナさんの顔がいきなり近づいてきた。僕が反射的に――情けなくも――目をつぶると、唇に触れるか否かというギリギリのところに口づけをされた。

まるで、一昔前の少女小説である。

とはいえ、これが僕のファーストキスだ。

窓の外で雨が降り始めていた。

＊＊＊

夕方、雨の中、遂に両親が帰ってきていた。

母は家がやたらと綺麗になっている事に驚き、父は「この機会にハウスクリーニングを頼んでおいた」と言った。母は父が家の事を考えてくれた事を喜んだが、僕は父を横目で睨んだ。

「実際、連中を預かる時にそういう条件も出しておいた」

父は小声で僕に告げた。母には話すなという事だろう。……いずれはバレるにしても、今はまずい。そんな事情があるらしい。

＊＊＊

――これでよかったんだ。

自室に戻って、僕は本心からそう思った。

仮にあのままサーティエイトたちとの共同生活が続いたとしても、僕らの関係がうまくいくとは思えない。サーティエイトは容貌美しいだけではない。文武両道において、僕をはるかに上回っている。端的に言って、住む世界が違う。

今はいい、所詮は学生だ。

だが、この先、僕とサーティエイトの差が広がる事はあっても、縮む事はあるまい。

共に時を過ごせば、遠からず失望させる羽目にもなったはずだ。

――それならむしろ、綺麗な思い出として残った方がいい。

とりわけ、僕にとっては思春期の……いや、一生の宝となる思い出だ。断言できるが、僕の人生であんな美少女と知り合う機会はもうない。一度あっただけでも、奇跡なのだ。

だが、あれほどの記憶は記憶に過ぎずとも珠玉足りえる。繰り言だが、僕は女の子にモテない。だから、少年時代を終え、青年時代を終えても、異性には縁がないだろう。寂しい中年時代を送る時に思うのだ。僕だって、モテた頃はあった……と。

「幻滅される未来よりは、美化される過去の方がいい」
僕は一人呟き、さっそく幻滅されるような行動に走った。
自室でＰＣを立ち上げる。ここまでは昨日もやったが、今日はさらに外付けのＨＤＤの電源を入れる。起動すると同時に、パスワードの入力を要求してくる。一六バイトの半角英数字を入れると、フォルダの中身が解放され、アニメ風美少女が画面に並ぶ。
「ふう」
一週間ぶりに見るあられもない美少女画像に、僕は一息つく。
たったこれだけの事がこの一週間はできなかった。
すべては、あの金髪碧眼美少女居候集団のせいだった。
……何だか、苛々してきた。僕はブラウザを立ち上げ、大手検索サイトに接続、そこでふと思いつき、英語版で入り直す。さらに倫理制限を外し、Ｘ指定すらも閲覧可能にする。検索条件に『画像ファイル大』を追加。その上で。
「えーと、blonde girls nude ……」
「金髪の娘が好きなのですか？」
「ううん、むしろ黒髪が好み」
「では何故、金髪娘の裸で検索を？」
「いや、食わず嫌いはよくないと思って。この一週間、実物の金髪を見続けたら、金髪も悪くないかなーって気になってきてね」
「でしたら、私の裸はどうでしょう？　正真正銘の金髪ですし、この検索結果よりも美形です。乳房の大きさで負けていても、全体の均整では勝っています」
「そりゃ、君と比べたら、この娘たちがかわいそう……」
と、そこで僕は振り返る。
背後にはサーティエイトが立っていた。

＊＊＊八日目＋＊＊＊

「な、なんで？」
「言った通りです。この検索結果よりも、私の方が美少女です。しかも、全方位から見る事が出来ますし。接触も可能です」
「う、うん。それはそうだけと、なんで、君が……って、触らせてもくれるの？」
「はい」

「……なんで？」僕は繰り返した。

「触りたくないのですか？」

「いや、触りたいよ。もっと色々したいよ。けど、なんで君が僕に触らせてくれるの？」

「それは……」サーティエイトの無表情が崩れた。その頬が赤く染まる。おまけに首を傾げる。「……何故でしょう？」

「……そもそもどうして君がここに？」

サーティエイトは長い沈黙を続けた。今までの滑らかな返答が嘘のようだ。

しかし、とうとう口を開く。

「――あなたが気になって、眠れませんでした。気が付いたら、ここまで来ていたのです」

よく見るとサーティエイトの髪は湿っていた。いつものヴァイタルウェアは乾いているので、気付かなかったが……

「もしかして、この雨の中、僕のところへ走って？」

「はい」

「それで僕の部屋で待っていたの？」

「はい」

――犬みたいだ。

僕は正直そう思った。ヴァイタルウェアは乾きやすいか、防水が利いている。だから、頭髪で判断する事になるが、雨風に耐えながら走ってきた事は想像に難くない。

――そういえば、家畜化（domestication）遺伝子群は『可愛らしさ』と関係しているという説もあったな……。元々、家畜と愛玩動物の境界は曖昧だし……。

つまり、人が犬や猫を可愛いと思う理由である。それどころか、豚ですら、愛玩動物の要素があり、珍しい毛色の豚が選択飼育された遺伝的形跡が確認されている。

――今のこの娘が異様に可愛らしいのも、家畜化（domestication）遺伝子群が原因なのか？

僕は抱きしめたい衝動を抑えながら尋ねる。

「……《刷り込み（インプリンティング）》仮説については？」

「説明は受けました。でも、私には関係ないと思い……いえ、思っていました」

「つまり、仮説は知っているし、自覚もあるんだね？」

「はい。でも、それはヒトが砂糖の好む本能のようなものでしょう？　なら、私に自制できないはずがない――と思っていたのですが……」

サーティエイトは俯いた。トゥエンティシックスの『優等生』という言葉を思い出す。

実際、その通りだったはずだ。僕の目から見ても、サーティエイトはマリオンプランの

理想形だった。だが、今は……。
「今はただ、あなたと離れたくないのです」
今の彼女は捨てられた子犬の様に震えていた。
その震えのせいか、サーティエイトの象徴たる三つ編みお下げが解ける。
ふわりと揺れる金髪は美しい。
しかし、サーティエイトは慌て出した。
「ああ、すみません。ちゃんと結んでこれなかったもので……」
「解いていたの？」
「懲罰の一つでした。個性を消すというのは……」
「……なるほど」
「とりわけ、三つ編みお下げは、優等生の特権と見做されていまして……」
「特権？」
「《第一設計者（ファーストプランナー）》が好きだった格闘ゲームキャラクターの髪形だったのです」
「へ、へえ……」
僕は少し頭痛がしたものの、思考を切りかえる。
「でも、わざわざ三つ編みにしてこなくてもよかったのに……」
「あなたに会うためですから。あなたに私だと個体認識してもらわねばなりませんから」
「……」
腰まである三つ編みお下げだ。解けば、膝まで届く。
今更だが、サーティエイトのお下げが凄まじく豪奢だった事を思い知らされる。
そして、この超長髪を維持する苦労は、男の僕にも想像はつく。
「女為説己者容――女は己を説（よろこ）ぶ者の為に容（かたちづく）る……か」
「……？」
サーティエイトは首を傾げた。どうやら、漢文には疎いらしい。ならば、この前にある対句も知るまい。
「……とりあえず、横になっていて」
「え？　……は、はい」
サーティエイトはぎこちなく僕の寝台に横たわった。僕としては『後の事を考え、今は疲労回復に努めて欲しい』というつもりだったが、妙な誤解を与えたのかもしれない。
とはいえ……と悩んでいると、携帯端末に電話着信が来た。
相手は――メッサリーナさん。
僕は一拍置いてから、電話に出る。

「はい」
『サーティエイトを知りませんかっ？』
メッサリーナさんは本気で焦った声だった。
「……どうしたんですか？」
『サーティエイトがいなくなったんです！』
僕は冷静に事実を確認する。
「ええと、ちゃんと拘束しておかなかったのですか？」
『可愛い妹にそんな事できるわけないでしょう！』
メッサリーナさんの声に怒りが混じった。
「でも、サーティエイトは問題行動を取ったわけですし」
『問題行動といっても、年頃の娘ならありがちな事です。こちらの評価も分かれています。だから、自室待機を命じただけです。それに一々、監禁できる程、我々の人的資源は豊富ではありません』
僕は拳を握った。重要な情報を入手できた。
『だから、今、サーティエイトを探しているんです。でも、見つからなくて。君なら何か心当たりがあるかと思って……』
僕は大きく息を吸った。次に吐く。メッサリーナさんが僕を信頼してくれていることがよくわかった。その上でその積み重ねた信頼を突き崩す一言を告げる。
「サーティエイトですか？　僕の隣で寝ていますよ？」
まさか、現実にこんな台詞を吐く日が来るとは思わなかった。メッサリーナさんも同じだったらしい。電話越しにも息を飲むのが聞こえた。
『は、はい？』
「ですから、彼女は自ら僕のところへやってきたのです」
『ああ、なるほど……』メッサリーナさんは明らかに戸惑っていた。しかし、その意味はわずか十五の僕に理解できるはずもない。『お手数をおかけしてすみません。すぐ、迎えに行きますので……』
「必要ありません」
『え？』
「ですから、必要ありません。この際ですから、僕は彼女と付き合おうと思います」
『……あの、付き合うって？』
「ですから、僕たち恋人同士になろうと思うんですよ」
『ちょ、ちょっと、待ってください。私は刷り込み仮説の話はしましたよね？　君なら、

マリオンプランの可能性を言わずとも理解できますよね？』

「ええ、本当に興味深いですね」

『その上で、あなたはサーティエイトとの別離を了承して下さったのでは？』

「勿論しましたよ。でも気が変わったんです。そも、二度と会わないとか約束した覚えはありません」

僕の社交力は乏しい。おまけに電話越し。それでも、メッサリーナさんが僕への認識を改めた事は間違いなかった。声音が明らかに違う。

『……君は自分が何をやっているのかわかっているのですか？』

「さあ？」

『誘拐です』

「ああ、僕が彼女に拉致された……と？　たしかに僕の心は彼女に奪われて……」

『戯言はやめなさい』メッサリーナさんは僕の言葉を断ち切った。『サーティエイトが君に何を言ったかは知りません。でも、その娘の想いなど、所詮、対人経験の乏しさ故の錯覚、本当の恋愛感情ではないのですよ……！』

「へー、あなたは『本当の恋愛』とやらを御存知だと？　これはお笑い草だなあ」

――佐伎毛利尓　由久波多我世登　刀布比登乎　美流我登毛之佐　毛乃母比毛世受

すなわち、

――さきもりに　ゆくはたがせと　とふひとを　みるがともしさ　ものもひもせ

――防人に　行くは誰が背と　問ふ人を　見るが羨しさ　物思ひもせず

正直、さっぱり意味がわからなかった。しかし、解答によると、これは想い人への愛を歌ったものだという。つまり、

――離島防衛に徴兵されるのは誰に決まったの？　……なんて、言う奴が羨ましくってたまらない！　（私なんて、想い人が徴兵されて、離れ離れになるのに……！）

という意味らしい。

苦笑いした。万葉集に載っているのだ。多分、万葉時代の歌だろう。よみびとしらず＝作者不明で、徴兵される男に恋慕している女なら、身分も高くない。おそらく庶民の恋歌だったのだろう（『古今和歌集』と違い、『万葉集』はよみびとしらず＝名を伝える事すら出来ぬ民草の声も多く拾われているという。……正直意味不明と言う点で大差なく思えたが、とりあえず、僕は『漢書』に対する『史記』の様なものと解釈していた）。

万葉時代の庶民の恋――そう考えると、皮肉な感慨に襲われたのだ。

古代の庶民なら、農村に住んでいる。そして、古代の農村など、集落と呼ぶに相応しい規模だ。【彼女】が実際に見聞きしたことがある男の数など、百人にも満たないだろう。

その想いもメッサリーナさんが言う対人経験の乏しさ故の錯覚だったはずだ。
では、狭い世界でたまたま出会った男女が魅かれあったとして、そこで芽生えた想いは下らないものか？
――違う。断じて、違う。下らないなどとは言わせない。
なるほど、【彼女】を集団で取り囲み、『貴女は騙されていただけなのです！』とでも、囁き続ければ、いずれは【彼女】も『私は騙されていただけでした』と音を上げるだろう。しかし、それは【彼女】の未熟さではあるまい。僕でも音を上げるし、メッサリーナさんでも音を上げる。それ位、人間の意思など脆いものだ。
しかし、脆いからといって、軽んじるべきではない。儚いからこそ、貴いものがある。少なくとも、雨の中を走り続けたサーティエイトの想いを、下らないとは言わせない。
僕の中に静かな怒りが湧き立つ。しかし、それは電話相手も同じだったらしい。
『クソガキ……！』
「え？　何、それ自己紹介？」
電話が切れた。
しくじったかという思いはある。挑発が過剰だった。冷静な判断ではない。
――僕は興奮するといつもこうだ。
ふと、中学の頃、不良生徒に絡まれていた事を思い出した。
あんな奴、適当に流しておけばよかったのだ。実際級友の多くはそうしていた。だが、僕にそんな器用さはなかったのだ。
サーティエイトも僕の電話相手を察したらしい。
「姉さまはなんと？」
「クソガキだってさ」僕は正直に答えた。「観念的な精神論だよ。実に下らない。こんなおファンタジックな表現をするって事は、具体的な対応案に乏しいと見ていいかな？」
「それは楽観が過ぎるかと……」
「だろうねえ」
第一、あのメッサリーナさんが演技をしていない保証はないのだ。
暗澹たる心持ちでいると、僕の携帯端末に再び電話着信が来た。
相手がメッサリーナさんだったので、躊躇わずに出る。
『落ち着いて話し合いましょう。私たちの関係は良好だったはずです』
「はい。奪われた形とはいえ、ファーストキスは感慨深いものでした」
たとえ、二十歳過ぎのオバサンとのものであっても――と、思っていたから、サーティエイトがこちらを見つめていた。ちょっと怖い。

『高級娼婦の相場をご存知ですか？』
「知るわけないでしょう」
『日本円にして、一晩５０万です。週三晩で１５０万。あ、アメリカの女子学生が自分の処女を競売にかけた時についた一億円以上という数字の方が参考になるかもしれませんね。サーティエイトなら、確実にそれ以上の値段がつくでしょうし』
「……何が言いたいのです？」
『君にその金額を捻出できるのですか？』
「彼女は娼婦ではないでしょう？」
『はい。しかし、それが自由恋愛です』
「……言いたい事はわかるつもりです……」
路上生活者と結婚したい女性は少ない。金持ちと結婚したい女性は多い。結局、自由恋愛とはすべての女性が娼婦になる制度だ。ただ、娼婦に上客を選ぶ権利があり、上客にも同じ権利があるだけ。
問題は僕がサーティエイトにとっての上客でない事だ。メッサリーナさんは一晩５０万円、週三晩で１５０万、処女なら一億と言った。世の中にはそれだけの金を出せる人間がいる。そして、サーティエイトのような美少女なら、そういった相手と付き合っていける。なのに、さほどの出来とはいえない僕と付き合うなど、正気の沙汰ではない。愛があれば――という台詞を気楽に使う奴は、僕自身信用できない。
――それにそもそも僕は……
と悩んでいると、メッサリーナさんは沈黙を誤解したらしい。
『そもそも、君は交渉できる立場だと思っていますか？』
「あ、それは思っています」
『根拠は？』
「さもなくば、こんな話し合い自体成立しない」
『……一応、要求を聞きましょう』
『僕とサーティエイトを高校卒業まで共に一緒に居させてもらう』でどうです？」
『それを認めて、我々に何の得が？』
「僕とサーティエイトの想いを踏み躙らずに済みます」
『サーティエイトはともかく、君はそんなに価値のある人間ですか？』
「なるべく、自惚れる様にはしていますよ。いじけていたって、いい事ありませんから」
僕はこの路線で突き進むことにした。
「何が不満なんです？　今まで通りです」

『サーティエイトの《刷り込み（インプリンティング）》がある限り、話がまるで違います……！』

「《刷り込み（インプリンティング）》の効力は疑わしいものなのでしょう？　熱が冷めれば、彼女自ら僕のもとを去りますよ」

実際、僕はその可能性が高いと思っている。しかし、例によって、メッサリーナさんの見解は違った。

『詭弁です。今のサーティエイトがどれ程の異常か……！　童貞ボウヤにはわかりませんか？』

「おや、では、あなたは非処女なのですか？」僕への口付けも唇には触れていなかった。

【マリオン】全般の男性経験の乏しさも考慮して、処女の可能性も検討していたのだが、これはおもしろい。「やーい。非処女、非処女、中古品～」

『……話になりません』

「じゃあ、駆け落ちしますね」

僕は電話を切った。

「そういうわけだ。荷物を纏めて、急いでこの家を出よう」

＊＊＊八日目＋＋＊＊＊

「……うん。去年の共有フォルダに格納してあるよ。四十八時間以内に連絡がなかったら、それを公開してくれると嬉しい。じゃ、シャーリー・ゼノグラシアによろしく」

僕は電話を切って、ため息をついた。結局、彼を頼ってしまった。というか、彼以外に頼れる友人がいなかったのだ。自然、後悔が募る。

――もっとちゃんと人脈を作っておけばよかった。

かつての同級生は友人の数に一喜一憂していた。そんな同級生を鼻で笑っていた過去の自分を蹴り倒したい。

すると、携帯端末に電話着信が来る。相手は――父。

僕の全身から汗が噴き出す。しかし、出ないわけにいかない。

『中道（なかみち）か？』

それが父の第一声だった。そして、それ以上は何も言わない。間違いない。これが僕の父だ。

「……と、父さん、頼みたい事があるんだ」

『何だ？』

「まずは僕を十五年間育ててくれたことに感謝を。次にこの十五年間に父さんと母さんが

僕に施した教育と、その結実たる僕の行動を思い出して欲しい。……我ながら、完璧には程遠いけど、一定の信頼に値する人間だという自負はある。だから、その信頼を費やして……」

『要求を言え』

「……まあ、そうなるよね……」

僕は心底、母に感謝した。父が無駄口を嫌う事を改めて知ったからだ。当然、交渉相手としては母よりも父が好ましい。ただし、無駄口大好きな母がいなければ、僕はまともに言葉を覚える事も出来なかっただろう。

「今、僕はＭＰＢ３８と恋愛関係にある。これを《マリオンプラン》に認めさせたい」

父は数秒の沈黙の後、

『……お前がＭＰＢ３８と駆け落ちしたという報告を受けた。これは事実だな？』

「うん。駆け落ち。……もっとも、彼女の対人経験の乏しさを考えると、拉致とか誘拐とか言われても……」

その言葉を父は遮る。

『ＭＰＢ３８は無能か？』

「いや……僕よりもずっと有能」

『無能なお前が有能なその娘を縄で縛って引き回しているのか？　そんな事が可能か？』

「不可能」

『ならば、お前たちは同意の上の駆け落ちだ。事実はそれ以外にない。どいつもこいつも下らん話をする』

そして、父は一方的に電話を切る。

「ふぅーー」

僕が緊張から解放され、大きく肩を落とすと、

「嬉しそうですね？」

隣のサーティエイトが僕の頬の緩みを見抜いたらしい。

「いやあ……やっぱり頼もしいなと思って」

メッサリーナさんは僕の行為を『誘拐』と言った。父に対しても、同じ説明をしたかはわからない。が、僕自ら告白したようにそんな一面はたしかにある。その一面のみを誇張して、父に伝える事は可能だ。

しかし、それでも、父ならば、その誤りを正す。今のように淡々と事実のみを検証してくれる。話が理性的・政治的な交渉にとどまっている限り、父は無敵だ。

――いや、本当にそうなのか？　ヒトの受精卵の核遺伝子操作、それも全面的な遺伝子

調整をやってる連中だぞ？　その時点で人命を脅かしているんだ。それに子宮の調達先も気になる。代理母を非合法に調達しているのだとしたら……。

悪い想像は広がっていく。

――もし、暴力的な手段に出られたら、父さんにも打つ手はないだろう。母さんの指を一本ずつ切り落とす様を見せつけられれば、僕だって言う事を聞かざるを得ない。

勿論、マリオンプランはそこまでやらないと考えている。実際、父さんはそんな恐れを見せなかった。他にも傍証はいくつかある。あの電話での交渉もそうだが、今、僕がこうやって思考を巡らせられる事自体、マリオンプランとの交渉可能性を示している。だからこそ、この駆け落ちに踏み切ったのだが……。

――本当にそうか？　僕の判断が甘いのではないか？　所詮、僕は先進国でのうのうと進学校に通っている人間だ。本当の悪意や暴力というものに慣れていないから……

「あの、トミヤマ・ナカミチ……バスが来ましたよ」

気がつくと、待っていたバスが眼前に停車していた。

「ああ、そうだね」

バスに慌てて乗ると、サーティエイトが言う。

「ところで……どこへ向かっているのですか？」

「白腹山（しろはらやま）」

「何故？」

「監視の目が緩そうだから」

白腹山（しろはらやま）は広義の舘山（たちやま）連峰の一部だが、実際には高志平野の丘陵地帯だ。交通が発達した現代ではなおさらである。だから、白腹駅周辺はそれなりに都市化している。勿論、県庁所在地でもある高志駅周辺に比べれば、田舎だが……。

「しかし、それでも二、三日もすれば、見つかるのでは？」

「うん。だから、白腹山（しろはらやま）で一泊した後、舘山（たちやま）に行こうと思う」

サーティエイトは一瞬絶句した。

「舘山（たちやま）って、舘山（たちやま）連峰の舘山（たちやま）ですよね？　日本三大霊山の一つで、文字通り三千メートル級の峰が連なるという？」

「そうだよ。明治維新直後から始まった国土調査における最終未踏領域、日本地図最後の空白地点でもある」

僕は露骨なお国自慢――田舎者の田舎自慢をしたつもりだが、サーティエイトはむしろ

脅えていた。予備知識を含めて、常人以上の敏感で脆弱な反応だ。人工的な環境で育った【マリオン】なら、山間部などに不慣れなはずという僕の推測は的中したらしい。

「そこまで大した事ないって。政府が山頂の三角測量にてこずっただけで、修験者は奈良時代に踏破しているし、現代では観光地化しているんだから」

勿論、その間の千年以上は人を寄せ付けなかったわけなのだが……。

「逆にその観光箇所さえ、外れてしまえば、見つけるのは難しい。僕にはボーイスカウト時代の野営経験もある。ひとまず身を隠すには適切だと思ったんだ」

経由箇所を白腹山にしたのはそのためでもある。実際、世間慣れしていない僕ですら、白腹山経由舘山方面行きの時刻表は把握していた。また、ボーイスカウト時代の野営具は持ってきたが、サーティエイトの分はないという問題も……。

「必要なら、白腹駅周辺で購入できる。観光客も多いから、君の金髪も誤魔化しやすい。何かあったら、観光に来た親戚の娘を案内する兄貴分で通すよ」

「あなたが兄？　……まさか、私が妹ですか？」

「何か問題が？」

「いえ、ただ私の方が、徒競走も速くて、偏差値もよくて、容姿も優れているのにな――と思っただけです」

サーティエイトは微妙に不満そうだった。僕はイラッと来たが我慢する。

「その通り。逆に言えば、君に足りないのは経験だけ。それさえ重ねれば、すぐに立場は逆転するよ……それよりも」

僕は椅子に座りながら、そっと札束を手渡す。

「五十万円。すぐに隠して」

「あ、はい」彼女はそれを懐に入れて「……あの、非合法なものなのですか？」

「いや、完全合法。母さんから渡されていた緊急用の生活費。たった一週間、家を空けるだけなのにさ……」

ちなみにメッサリーナさんからもらった計百万円は文字通りの・し・をつけて返却予定だ。一応、白腹山のＡＴＭで僕名義の口座から五十万下ろして、そちらを僕が持つつもりだが……。

サーティエイトの感想は違ったらしい。

「……愛されているのですね」

「信頼されていないだけさ」

そっぽを向く僕の頬が熱かった事は否めない。照れ隠しに言葉を重ねる。

「使い道は任せるけど、一度に出したりはしないようにね。目立つから」

「了解です。が、目立つというなら、この会話や私の容姿は？」
内容がＳＦじみている上、さすがに小声で話しているし、例のヴァイタルウェアの上にデニムを羽織って貰っている。だが、盗み聞きはできるだろうし、髪は染めてすらない。
「……そこは割り切るしかないと思う。対案も時間もない。ただ、高志駅周辺に比べて、人口密度は低いし、監視装置もまばらだ。幾分マシだと考えている」
「ああ、すみません」
と、彼女はひとまず納得したものの、そこで重要な疑念を抱いたらしい。
「いえ、しかし、そこまで都市部から離れて、生活はできるのですか？」
「短期的には可能。中長期的には不可能」
サーティエイトの顔をしかめる。
「それを承知でそこへ向かう理由は？」
「僕と君とじゃ、世界中のどこでだって、中長期的な生活は不可能だから」
僕ははっきりと言った。
「つまり、短期的に決着をつけるつもりであると？」
「そうだよ。メッサリーナさんから電話があった時に、僕がどうして正直に君が傍にいる事を明かしたと思う？」
「あなたは嘘をつけない性格だからでしょうか？」
「もう一つは興奮すると口が止まらなくなる性格だから」僕は苦笑した。「そして、最後の一つは僕らが生活していく上で、メッサリーナさん達の賛同はどの道不可欠になるから。繰り返すけど、僕と君とじゃ、世界中のどこでだって、中長期的な生活は不可能だよ」
僕もサーティエイトも所詮十五の少年少女に過ぎない。勿論、既に齢十五とも言える。純粋な知力や体力ならば、そこらの大人に負けないだろう。それだけの教育を受けさせてもらった。しかし、その結果、社会経験が致命的に足りない。
サーティエイトに渡した五十万も、僕の総合口座に入っている五十万も、自分で稼いだものではない。僕はバイトすらした経験がない。元は親の金だ。勿論、この百万は僕への先行投資だし、『その分勉強なさい』と母に言われたから、進学校に滑りこむ事も出来た。恥じてはいない。だが、その結果、社会経験に欠けているのもやはり事実だ。
「伝承によると、【労働】なるものの激甚過酷さは他の追随を許さず、今時の若者に耐えられる者なしと言う」
「そ、そこまで……！」
「また、【労働】には『こみゅにけーしょんすきる』なる特殊技能が不可欠という。これは有効求人倍率が１以下でも、全員を就職可能にする技能らしい」

「求人倍率という概念そのものを超越する技能が……！」

「さらに、【労働】には『空気を読む』力が必要らしい。ここでいう空気とは物質ではなく、絶対神を示す。かの者の意思を正確に読み取り、従う事が必要とされるんだ」

「労働者すべてが預言者にならねばいけないとは……！」

山間部へ逃げるのはそのためでもある。

前にも述べたが、十代の学生は、自然科学に秀で、人文社会に疎い。繰り返すが、社会経験が少ないからだ。とりわけ、僕やサーティエイトはその傾向が強い。ならば、無慈悲だが、単純な自然環境の方がマシだろう。

あるいは社会が未熟だった五十年前なら、僕の様な『さほど有能でもない上、癖のある人材』を受け入れる余地もあったかもしれない。だが、既に日本は先進国として、成熟を終えてしまった。勿論、安全で便利な社会はその結果である。一週間前までは、僕もその恩恵に浸っていた。しかし、今となってはその完成度の高さが逆に僕らを追いつめるかもしれない。

――例外は行政特区の飛天市ぐらいだ。

とはいえ、そこへの『亡命』は難しい。当然だが、

「そもそも、僕も君も虐げられた訳ではない。それどころか、衣食住は保障され、十分な教育を受けさせてもらった。先進国の中でもとりわけ恵まれている類だよ。こんな僕らを匿ったりすれば、匿う側が逆に誘拐犯にされかねない。第三者の手助けは期待できない」

むしろ、簡単に匿ったりする方がどうかしている。法律の問題もあるが、人間としても信用できない。

「だから、メッサリーナ姉さまたちに、私の行動を認めてもらうと？」

「**認めてもらうのではない。認めさせるのさ**」

できるのですか？――と反駁されれば、「さあね」と答えるつもりだった。

できるかできないかではない。やりたいかやりたくないかだ。そして、やりたいから、やれるだけのことをやるだけだ。――と言うつもりだった。

しかし、サーティエイトは黙ってこちらを見つめた後、素っ頓狂な事を言い出す。

「め、命令を下さい」

「はあ？」

「お願いします。私に命令を下さい。『ＭＰＢ３８ヘトミヤマ・ナカミチの【管理者（マスター）】権限承認を命令』と」

「……別にかまわないけど」

僕にしては珍しい態度だった。【管理者（マスター）】とやらの意味は今一よく分からないが、他者

の人生を背負うなんて趣味ではない。相手がサーティエイトだからこその台詞だった。
しかし、彼女にはまだ不満らしい。
「表現が不明瞭です」
サーティエイトは**頬を膨らませて**、エラー判定を出す。
……これじゃ、どちらが主（マスター）か、わかりやしない。もっとも、世の中なんて、そんなものだが……。
僕は観念して言う。
『ＭＰＢ３８へトミヤマ・ナカミチの【管理者（マスター）】権限承認を命令』……これでいい？」
「了解。ＭＰＢ３８はトミヤマ・ナカミチを【管理者（マスター）】と承認します。以降、トミヤマ・ナカミチは管理者権限を永久的に利用可能です」
「……ではまず情報共有をしておこう。今後を考えれば、部外秘も含めて、いいね？」
「はい。管理者権限があるので問題ありません。あ、言っておきますが、これは暫定的な処置ではありませんよ。正式な、繰り返しますが、**永久的な処置**ですからね……！」
「……？」
よくわからない理屈だったが、ここでようやく僕は《マリオンプラン》の全貌と現状に触れる事が許されるのだった。
それはバスの白腹駅前到着と時を同じくしていた。

＊＊＊八日目＋＋＋＊＊＊

白腹駅近くで、野営具を買い揃える。
といっても、基本は僕の野営具をもう一式用意すればいい。例によって、母は過保護だ。だから、僕の野営具は高品位なものが買い揃えられている。さらに僕自身の野営経験で、問題点の洗い出しも終えている。結果、予算が十分なら、ほとんど機械的な作業になる。
「念のため、目録化はしておいた。これでいいね？」
僕が今時の紙メディアでサーティエイトに渡すと、彼女は眉を顰める。
「問題ありません。……が、質問をよろしいでしょうか？」
「……許可する。何か？」
「これ、ボーイスカウト時代のあなたの野営具一式を参考にしているのですね？　そして、ボーイスカウトとは少年少女の集団で、野営や長距離踏破を行い、心身の研鑽を図る組織ですよね？」
「そういうお題目だけど？」

「……その割に自己完結性の高い装備では？」

サーティエイトは訊ねた。

実際の経験はともかく、机上の訓練は受けたのだろう。目録を一読しただけで、特徴を看破したのはさすがだ。集団――複数の人間で野営するなら、装備の運搬は分担していい。なのに、彼女の言う通り、僕の装備は自己完結性が高い構成だった。畢竟、単独野営向きである。

僕はその理由を次のように説明する。

「部品取りのためさ。補充が難しい以上、整備は必然的に『共食い』になりそうだしね。……説明は以上だ」

「は、はい」

語気を強めると、サーティエイトはそれ以上、反駁をしなかった。

僕は大きく溜め息をつく。

――『お前の数多い欠点の一つは変に民主的な事だ』

ボーイスカウト時代の隊長（教官）に言われた台詞が甦る。山中踏破において、進路に迷った時の事だ。その班の長だった僕は、班員皆の意見を聞き、多数決で進路を選んだ。紆余曲折の末、目的地に到着し、報告書を提出すると、隊長は僕一人を呼び出し、叱責を始めた。

――『何のためにお前を班長にしたと思う？　今ではお前がこの隊で最も経験豊富で、判断力に優れているからだ。そのお前が有象無象の声を聞いてどうする？　そんなものは責任回避に過ぎない。今回はうまくいったからいい。しかし、一歩間違えば、遭難だった。昔の事やその小柄さで、お前を侮っている奴がいる事はわかる。だが、それでも、今後は班員に服従を徹底させろ。最悪でも、山中では長であるお前がすべてをしきれ』

……当時の僕は隊長に賛同しかねていた。確かに、隊長は引率の大人でもある。僕らが遭難すれば、それこそ責任問題だ。僕に委ねたい気持ちはわかる。

が、中学生だった僕に班員の命を預かる覚悟などなかった。それに民主的で何が悪い。たしかに少年偵察兵（ボーイスカウト）は準軍事的組織（パラミリタリー）に由来する。その原点に非民主的な気風はある。が、それは昔の話だ。今ではお遊び気分が大半だ。あの隊長はボーイスカウト指導者としては昔気質で、僕自身も『古風な』教育と洗礼を受けたのは事実だ。しかし、かといって納得していたわけではない。大体、携帯端末のＧＰＳがある以上、今時、遭難などありえない。

――……と思っていたけど……。

現状、探知が怖いから、迂闊に端末は使えない。今もＧＰＳではなく、地図で現在地を確認している。山中に入れば、三角測量すら必要になるかもしれない。あの頃、こんなの

今時使うかと嘲り、三角関数は高校で習うのにと愚痴っていたが……、

――結果だけ見れば、あの隊長が正しかったという事か……？

僕はその事実に身震いしながら、野営具店の扉を開ける。母に連れられて来た店だったが、幸いにも店員は僕の顔を覚えていなかったらしい。むしろ、サーティエイトに興味深々だった。

「この目録にあるものを一通り下さい」

僕はそう言って、紙を店員に手渡す。

「は、はい」店員は目録を一読すると、あからさまに喜びと驚きを顔に出した。「しょ、少々お待ち下さい。揃えるのに二、三十分ほど……」

「了解です。座って待っていてよろしいですか？」

「勿論でございます。何か御飲み物は？」

「お茶を二人分お願いします」

「はい。只今……」

慌てる店員を尻目に、僕はサーティエイトを連れて、店内の椅子に腰かける。

「あの、いいんですか？」

「問題ないよ」僕は出されたお茶に口を付け、小声で説明する。「そこそこの高級品を大量購入だ」

注文目録にある寝袋（シュラフ）一つとっても、ストレッチケイマンのＣ・マ・イ・ナ・ス・５・だ。他の装備もこれに準じる高品位で、こんな田舎で入手可能な市販品としては最高級揃いである。

（そして、こういうのをポンと買う辺り、僕は苦労知らずなのだろう。至如少弟者、生而見我富。故輕棄之――少弟の者の如しに至れば、生まれて而（しか）るに我が富を見る。故に之を棄てるを輕し――である）

「店員が喜ぶのも驚くのも当然。一式揃えるのに時間がかかるのも自然」

「……じろじろ見られている気もするのですが？」

「金髪はこの辺りじゃ、珍しいからね。美少女ならば尚の事。といっても、観光客で通ると思う。東亜系が多いとはいえ、西欧系の登山客も少なくないしね」

どちらかと言えば、僕との組み合わせが問題になると思う。それでも、駆け落ちを連想されるかは微妙なところだ。

「店員の口に蓋はできないけど、この程度の客は他にもいるさ。それにこんな田舎じゃ、記録が電子化はされても共有はされていない。そんなに簡単には見つからないよ」

「……そのために高志駅ではなく、この白腹山（しろはらやま）を選んだのですね」

サーティエイトも納得したようだった。

「では、話の続きをしよう。《アーデルハイト＝プロジェクト》だっけ？」
「はい。元々、《マリオン＝プラン》は《アーデルハイト＝プロジェクト》の一つとして、出発しました」
僕は英語が苦手なので、少し考え込んだが、プロジェクトがプランを内包している事は察せた。
「一年戦争後のガンダム開発計画（プロジェクト）の中に、汎用型としての一号機設計（プラン）があり、核攻撃型としての二号機設計（プラン）があり、拠点防衛型の三号機設計（プラン）があったみたいな関係だね？」
「は……？」
「あ、いや、ごめん。忘れて」
「……製品型（Production model）を量産型？と翻訳したり、時々意味不明な事をおっしゃいますが……」
「あー、つまりあれだ。稲の品種改良計画（プロジェクト）があったとして、その中にはコシヒカリ設計（プラン）もあれば、ササニシキ設計（プラン）もあったという事だね？」
「ええ、その通りです。ただし、我々《マリオンプラン》はその中でもコシヒカリ並みの出来でした」
「凄いな。日本一の出来だったんだ」
コシヒカリは１９５６年に誕生した古参種だが、今でも作付面積日本一だ。味が良く、適応性も高い。ついでに高志（越）の産まれとしては、越光（コシヒカリ）という名前からして素晴らしい。
「というよりも、世界一かもしれません。計画（プロジェクト）の中には大小様々な設計（プラン）がありましたが、どんな経路にせよ、大量生産にまでこぎつけたのはこのマリオンプランぐらいでしたから」
「そして、君はそのうちの一体であると？」
「はい。現在、マリオンプランの試験型（テストモデル）でもあった根源三十六体（オリジナル＝サーティシックス）の初期二世代の中から、Ｍ１１～Ｍ１３を除いた９名が現在Ｂ系列９８名の教導を担当しています」
「９名で９８名を教導……一人当たり平均９～１０名……。ちょうどメッサリーナさんが教える側で、君たち九人が教えられる側だったように？」
「はい。元々この計画（プロジェクト）はその性質上、長期の継続性が不可欠でした。そのため、自律的な自己補完機能が要求されたのです」
人間一人育て上げるなら、十年二十年は覚悟せねばならない。その間に想定外の事態が起こる事は当然想定された。そのため、計画に障害が発生した時、自律的に軌道修正し、不足部分を自己補完できるようにせねばならなかった。
「そのため、マリオンプランで採用されたのが徒弟制です。要は、あなたもご覧になった姉妹間の教導ですね」

つまり、プランで育成した【マリオン】自身に、次世代の【マリオン】を育成させればいい。そうすれば、最初に【マリオン】を生産した計画者（プロジェクター）や設計者（プランナー）が欠けても差し障りはない。哺乳動物の仕組みそのものだ。

――そして、そのための姉妹教導か……。

僕は体育のバスケットボールを思い出していた。サーティエイトは当初バスケに不慣れだったが、すぐ慣れて、見る見る上手くなっていった。瞬く間に他の女子生徒を圧倒するようになった。基礎能力の差を考えれば、自然な話だ。しかし、肝心なのはその後だろう。サーティエイトは自己の能力を一旦確立すると、次はパスを出すようになった。明らかに自分よりも無能な仲間に成長の機会を与えた。姉妹教導の中に、明確な後進育成の理念が含まれていた証だろう。

【マリオン】自身の手で【マリオン】を増殖させていく――それがプランの最終的な目標でした。が、同時に当初はあくまでも保険機能であり、補完機能でしかありませんでした」

「最初の数十年はあくまでも計画者（プロジェクター）や設計者（プランナー）とやらの管理下で事を運ぶ予定だったと？」

サーティエイトは文字通り肯（がえ）んじた。

その場合、僕は彼女と出会う事もなかっただろう。

「てことは、想定外の――まあ、ある意味想定通りに――不測の事態が起こったと？」

「《荒夏》崩壊です。飛天市の事はご存じでしょう？」

「荒夏事変――いや、飛天紛争というべきかな？」

飛天市――それは先進計画城壁都市として誕生しながら、一時期は日本唯一のＬＩＣ／低烈度紛争地域（Low-Intensity Conflic）にまで落ちぶれた行政特区の名だ。

元々、飛天市は右派経済学の実験場として用意された。規制を緩和し、法人税も廃止し、所得税すら非累進化する。発生する失業者には余剰生産力をベーシックインカムみたいな形で再分配すればいい――という本土では受け容れがたい方針を試すための箱舟であり、舟板だった。

だが、その陰には《荒夏》と名乗る『自由を求めた悪の秘密結社』が存在した。

この《荒夏》は自由主義の権化であり、それ故に飛天市の設立にも深く関わっていた。何でも、産業の高度化と経済の国際化が齎す社会問題を『民族主義を基盤とする国民国家から、自分たちを切り離す』事で解決しようとしたらしい。

しかし、それは国民国家が多数を占めるこの世界では『悪の秘密結社』という事になり、既存政府から袋叩きにあった。西南戦争以来百数十年ぶりとなる内戦の勃発だ。

これがいわゆる荒夏事変である。

――その結果、《荒夏》は敗北。

飛天市も純粋な行政特区としてやり直す羽目になる。

ただし、《荒夏》も『独立』のために無為無策ではなかった。

人口では圧倒的に不利だった彼らはその分を技術開発で補った。現在もなお独占状態の結晶細胞技術がその典型だ。また、それを除いても、行政特区として規制緩和された結果、異様に先鋭化した技術がいくつもある。

おそらくそれらが《マリオンプラン》の基幹技術となっている。そう考えれば、色々と辻褄が合う。まず、このプランに必要とされる先鋭的な技術や環境を、飛天市なら、用意できる点。もう一つはプランの成果物が、僕の様に平凡な田舎の男子高校生にも、回ってくる点だ。

荒夏事変だけでも大事だったのに、飛天市ではその後も埋み火の様に揉め事が続いた。

これがいわゆる飛天紛争である。

こうなると先進計画城壁都市を期待していた者達も、打って変わって飛天市から、逃げ出す羽目になる。昔ながらの『都落ち』で人材と技術が流出するのだ。

「……貴族が戦乱を避けて、『都落ち』した後、田舎の豪族に庇護を求めるのはよくある話だったけど……」

「構図は同じですね。違うのは、元々、旧《荒夏》は成熟による必然的停滞を嫌っていた集団なので、これも予定通りという側面がある事。もう一つは、昔の地方豪族の役回りが今は地方公務員であるあなたのお父様に回ってきたという事です」

「物語の類型なんて、限られている訳だ」

同時にこれは《マリオンプラン》との交渉可能性をやはり示している。

「一応、僕の想定と大差ないかな？　やはり、《マリオンプラン》はあくまでも一研究機関規模だ。近代国家の様な強大な権力機構ではない」

「それでも、高校生二人に比べれば強大ですが……」

「うん。ただ、《マリオンプラン》は僕達二人だけを相手にしているわけではないからね。メッサリーナさんも電話で人的資源に限りがある事を臭わせてた。現に君も脱走できた。『都落ち』以前の本来の《マリオンプラン》はわからない。けど、『都落ち』以降の現状の《マリオンプラン》は質的にはともかく量的には脆弱なんじゃないかな？」

「たしかに元々少数精鋭志向でしたし……量的に充実していれば、あなたのお父様の力を借りる必要もないはずです……」

そもそも、【彼女たち】が僕の家に居候する羽目になったのも、単純に住処が欲しかった側面があるはずだ。勿論、現行社会への適応実験の側面もあったろうけど。

「あるいは正式に誘拐事件として、警察に連絡すれば、大規模な捜査網の展開もありえるだろうけど……」

「それはないと思います。【我々】の存在自体、まだ微妙な位置ですから」

サーティエイトはきっぱり言った。デザイナーベビーの存在はまだ都市伝説の領域だ。少なくとも、一般に公開できる段階ではない。だからこそ、地方公務員の父さんにお鉢が回ってきた。

だからこそ、

――僕はそれなりに『いい子』だから、まだマシな方。という事で、これ以上の混乱を避けるためにも、【マリオン】の番（つがい）として容認あるいは黙認してもらう。

というのが、一応考えられる落とし所だった。

「……ただ、それでも、《マリオンプラン》の一部が、僕らの追手になる事は避けられないだろうね」

勿論、今も既に泳がされているだけという可能性も高いが……。

「サーティエイト、どのくらいの人間が追手になると思う？」

僕は念のために聞いてみたが、彼女の答えはある意味予想通りだった。

「すみません。私は末端なのでプランの全容を把握できる立場にはないのです」

「だろうねえ」

サーティエイトによると、メッサリーナさんの下にいた残り八人は敵に回るだろうが、それ以上は想像もつかないという。

「未確認情報も含めれば……例えば、ＭＰＳの存在なども噂されていますし」

「え、ＳってＳ系列の事？」

「はい。Soldier Seriesだといいます」

「兵士系列（ソルジャーシリーズ）って……そんなのまでいるの？」

「ですから、未確認情報です」サーティエイトは緑茶を口にする。「それに現行のマリオンプランである以上、実在したとしても、遺伝情報については我々と同じものを使っているでしょう」

「根拠は？」

「我々【マリオン】が現行の技術水準からすると、望外の成功例だからです」

以前に述べた守破離というやつだ。その遺伝情報が記録されている以上、後続者はまずその成功例を模倣する事から始める。

「ですから、仮にＳ系列が存在したとしても、それは教育課程で、より兵士向けの調整をされているだけの美少女に過ぎないでしょう」

「……というよりも、現代戦における兵士なんて、それで十分なのかもねえ……」

アメリカ合衆国の平凡な女子高生と、イラク共和国の屈強な成人男性が、それぞれ自国軍隊に入って戦争したとしよう。この時、女子高生は成人男性をほぼ一方的に虐殺できる。これは冗談ではない。実際にイラク戦争のキルレシオは一対百とかになっている。

勿論、現代戦でも最低限の体格や体力は不可欠だ。だが、その必要条件さえ、満たしてしまえば、あとは規律、錬度、装備、戦術、物量の勝負になる。このうち、個人の才能に依存するのは規律と錬度であり、その点でこの金髪碧眼美少女たちはむしろ突出している。教育課程で兵士向けの調整を受ければ、尚の事だ。

「はい。たしかに個体としての我々はさほど兵士向きではありません。特にトゥエンティシックスやフィフティエイトなど、どう見ても兵士の身体には見えないでしょう？　私にしても、似たり寄ったりです。……が、組織運用すれば、この短所は殆ど表面化しませんから」

「社会的な影響を加味すると、短所じゃなくて、むしろ、長所だしね」

美少女は得である。……旧【荒夏】の技術思想そのままだ。

「ええ。このように長所が多く短所に乏しい現行マリオンを退けてまで、信頼性に欠ける新規技術を採用する理由はありません。プロダクションモデルなら尚の事。少なくとも、私がＳ系列の担当なら、遺伝子は全く同じものを使い、規律や錬度に重点を置いた教育を施しますね。そうすれば、成果物が安定した高品質を保てるだけなく、対照実験としても興味深い結果が得られるでしょう。さらに、この場合、私たちにＳ系列の情報は隠されるはずです」

「なるほど、二重盲検法というわけか」

僕は苦笑いをした。精密な人形にも見えたサーティエイトだが、この時は子供のような無邪気さで語っていた。まるで自然科学者の卵……実に人間らしい顔だ。

――そして、それはメッサリーナさん達が君を可愛がっていた証拠なんだろうな。

＊＊＊九日目＊＊＊

予定通り、白腹山（しろはらやま）で野営具を購入して一泊、朝早く舘山（たちやま）方面行のバスで移動。

日が真上に登った頃、僕らは舘山の松林で個人用テントを張っていた。

サーティエイトは少し早いのではと訝かしそうだったが、「僕は君と違って、貧弱なの。体力温存さ」と言ってやるとあっさり納得したようだった。

――あっさり納得されるのも、どうかと思うけど……。

とはいえ、無理なからぬ話でもある。

今まで明記する機会がなかったので、ここははっきり示しておこう。

僕の身長は百五十センチ、体重四十一キロ――双方共にサーティエイトを下回っているのだ！

小柄である事を気にしてない。大体この年頃は女子の方が早熟なものだ。今は長身痩躯矜高狷介な父も高校まではチビだったというし、僕自身、日本製品は小型軽量たるべしという保守派である。

――しかし、サーティエイトが、より小柄な僕を気遣うのは自然な話だ。

と思っていたら、サーティエイトが松の木の皮を剥いでくんくん嗅いでいた。

――この娘、何をやっている……？

テントの張り方は教えたはずである。いや、教えずとも、【彼女たち】ならば、テントの張り方ぐらい自力で理解できるはずだ。にもかかわらず、サーティエイトは子供のように松の木に夢中だった。これは一体どういう事か？

「……サーティエイト？」

「あ、すみません。『松の甘皮』とはこういうものかと思いまして」

「はあ？」

「松の木の樹皮は救荒植物として有名でしょう？　けれど、私は実物を触るのは初めてで……つい……」

「救荒植物？」

「いえ、わかってはいるんです。鹿ではあるまいし、ヒトが松の樹皮を生食消化するのは難しいという事も。加工するにも手間がかかるから、この状況では現実的ではないという事も。……ただ、面白そうだなと」

「……」

――思い付かなかった。

僕にとって、松とは第一に燃料だった。煙は多いが、火が付け易い。葉は素手で千切れ、松ぼっくりは小指で運べる。そして、枝木の燃焼熱量はずば抜けている。不器用な僕でも燐寸（マッチ）一本で、お湯を沸かせる。実際、重宝していた。

（潮風に強いので、海沿いでは防風にも便利だが、今回は関係ない）

だからこそ、ここで野営しようとも考えた。

が、食料という発想はなかった。海外で松の実を食用にする事例は知っていたものの、日本のアカマツやクロマツは風媒花なので、その実は小さく、食用にはならないと諦めていたのだ。

勿論、当人が言う通り、この状況では現実的ではない。豊富な知識は優良な教育の賜物だろうが、いかにも経験が浅い。

――しかし、その経験をこれから重ねていけばどうなる？

サーティエイトは遠からず、僕の手助けなど要らなくなるに違いない。

それは他の【マリオン】も同じだろう。僕が山間部に逃げたのは、彼女たちが不慣れな環境を選んだ結果だが……。

「この優位性って、いつまで持つのかな？」

思わず自嘲してしまう。

次の瞬間だった。

電子音が三回鳴り響く。

携帯端末は自閉設定にした上、電波隔離（それ系の透明素材でぐるぐる巻き）しておいたから、通常着信はあり得ない。

ならば……。

「ビンゴ」

「は……？」

「今、電波が飛んだ――多分、君に発信器がついている」

「そんな……！　あなたの部屋に向かう前、その対策として、新品のヴァイタルウェアに着替えてきました……！　勿論、ウェアに標準装備されている通信機能は物理排除済み。不要な手荷物も捨ててきましたよ」

「皮膚下は？」

「このヴァイタルウェアには一定の電波遮断機能が……」

そこでサーティエイトはハッとして、額を抑えた。どうも心当たりに気付いたらしい。

「薄い直方体状の物体を確認、長さ約二センチ、多分……炭素系素材です。やられました。おそらく『施設』に戻った時です……！」

僕は電子音を発した『機材』を取り出し、さらに携帯端末のアプリを立ち上げた。勿論、通信規格も接続端子も合わせてある（そう、僕も男だ。合体変形に心奪われる性なのだ）。

「広帯域受信機（ワイドバンドレシーバー）――基本はラジオの上位機種みたいなものだけど、設定次第で、盗聴機やＧＰＳ……ではないか、あれも受信しているだけだから……ええと、位置情報を暴露する電波発信機を見つける事ができる」

「……推測ですが、ただの電波発信です。盗聴機能まで付ければ、大型化するはずです

し」

「僕もそう思う。メッサリーナさんなら、君たちの生活の質（Q.O.L）には気を使うはずだ」

念のため、三回の発信記録を携帯端末で解析してみる。が、やはり、情報量は少ない。これで何時間分もの音声情報を運ぶのは困難だ。勿論、この解析アプリも所詮は民生品である。裏をかく事も不可能ではない。だが、普通に考えれば、位置情報のみを暴露したと見るべきだろう。

――こういうのは下手に多機能化するより、むしろ簡素化して、冗長性を確保する……はず。大量に出回る民生品と違って、市場の試験を受けられないから、信頼性には不安が残る……はずだから。

はずはずばっかりだが、仕方がない。所詮、こちらは一介の高校生なのだ。おまけに、情報源の大半はマンガとアニメ、そしてラノベだったりする。

ただし、いかに《マリオンプラン》といえども、物理法則は覆せない。送信電力や電池寿命の限界からは逃れられないはずだ。

――体内有機物を材料や燃料にして、フェイズドアレイアンテナでも形成すれば、話は別だけど……そんな超技術力はなさそうだし。むしろ、『枯れた技術』で手堅く攻めてくる類だな。《マリオンプラン》の方向性からして。

だから、単純に僕らに見落としがある――例えば、実は他にも発信機が埋め込まれてる可能性の方が怖い。繰り言になるが、**今も既に発見済みだが、あえて泳がされているだけという可能性**は高い。それがラノベのお約束であり、相手次第だが、最も現実的な解だ。

とはいえ、サーティエイトはラノベなど読まない性質なのだろう。真剣そのものな顔で僕に訊ねてきた。

「でも、何故今になって？」

「ド田舎の山中だからね。ノイズが少ないから特定し易いんだろう」僕が街を避けたのはそのためでもある。「それに最初から、何時間おきにしか発信しない設定だったんじゃないかな？　そっちの方が電力消費も抑えられて、小型化し易いし、発見もされ難い。ええと、こういうの何て言ったっけ？」

「……バースト発振方式です」

サーティエイトは悔しさと苛立ちを隠さなかった。

「何故、嬉しそうなんですっ？」

「言ったろう？　短期的に勝負を付けるつもりだったって」

「居場所が一方的にばれたんですよっ！」

「今、この瞬間の居場所はね。でも、バースト発振方式とやらは、一定周期でしか電波を

飛ばさない」

「あ……」

「メッサリーナさん達が今すぐここに駆け付けようとしても、その間に僕らは移動できる。結局、向こうはこちらの大まかな位置しかつかめていない。そして、僕らはそれに気付いていて、しかも、僕らが気付いている事に、あちらは気づいていない可能性がある」

僕は微笑が隠せなかった。

「待ち伏せができる」

結果：失敗しました。

「うぁぁぁぁぁぁぁぁ！　サーティエイト助けてぇぇぇぇぇ！」

微笑を見せた二時間後、僕は山中を走って逃げて駆け回る羽目になっていた。

埋め込まれていた装置を簡単な外科手術で排除した後、僕らは待ち伏せのためにテント作成をやり直した。サーティエイトは不安げだったが、僕はそんなに早く来られるはずがないと説得したのだ。その上で、二つのテントを離し、どちらが襲われても、もう片方が駆け付けられるようにもした。

後はテントが出来上がってから、罠を考えればよい。そう考え、テントを完成させた。

するといきなりそのテントが僕の目の前で砕け散った。

代わって、綺麗なシャギーショートの金髪と碧眼あらわれたのだ。

「死になさい……」

開口一番、殺害宣言した美少女はＥカップの巨乳を揺らしていた。

つまり、体型が一目瞭然な**ヴァイタルウェア姿のトゥエンティシックス**だった。

後から知った事だが、テントを砕いた一撃は踵（かかと）落としだったらしい。ただし、トゥエンティシックスの踵（かかと）落としは空高く飛び上がり、地に足を付ける事なく、回転し、その重力エネルギーをも完璧に運動量に変換した一撃だった。それ故に、僕が強度を重んじて組み建てていたテントは粉々になり、僕は恐れと驚きのあまり、走って逃げて駆け回る羽目になったのだ。

――しかし、あの殺意が本物なら、僕らは泳がされていたのはなく、単純に逃げ切っていたという事になる。これはちょっと嬉しいかも……。

そう思った時、僕の足が木の根に取られた。僕は転倒し、大地に伏せる羽目になる。

次の瞬間、僕の真上を何かが通り過ぎ、目の前の松の木が砕け散った。

勿論、トゥエンティシックスの仕業だ。動きが速過ぎて、やはり詳細はわからなかった

ものの、それは『水平錐揉み回転両足蹴り』とでもいうべき異常な一撃だったらしい。
「あ、当たったら、死なないか、それはっ！？」
「悪い虫を見たら、踏み潰したくならない？」
「何で！？　こういう時は拘束だろ！！」
僕は「常識的に考えて！」という決まり文句を言う事すらできなかった。その前に背を翻して、再び逃げ出そうとして、やっぱりトゥエンティシックスに先回りされたからだ。
ただ、今度はかろうじて目で追えた。
トゥエンティシックスの跳躍は凄まじかった。
上空でくるくる回っていた。とても同じ重力下とは思えない。まるでニンジャのような――勿論史実のそれではない。いわゆる勘違いされたニンジャを思わせる――無茶苦茶な動き（ムーヴ）だった。
そして、僕の前に空から飛び降りてきたのだ。
――この娘、今、僕の真上を飛び越えて先回りした……！？
こうなれば、僕も認識を改めざるを得ない。異常だ。≪マリオンプラン≫が、ではない。トゥエンティシックスという一歳年上に過ぎない女子高生が異常なのだ。その運動能力は遺伝子調整とは別の次元で突出している……！
僕の怯えを読み取ったのか、トゥエンティシックスは露骨な嘲笑を浮かべた。
そして、己の身体を見せつけるように胸を張る。
……こんな時にもかかわらず、トゥエンティシックスの巨乳は揺れていた。なるほど、サーティエイトに『どう見ても兵士の身体には思えない』と断ぜられるのも無理はない。
しかし、今の僕にはその姿が機能美と芸術美の素晴らしい調和に思える（元々サーティエイトも外見の話をしたのであって、中身の話ではなかった）。
よく見れば、彼女はヴァイタルウェアの他は携帯端末と短刀一本しか身につけてない。着の身着のまま駆け付けたらしい。それで、想定よりも接触が早かったのだ。おそらく、素手でも十分という判断なのだろう。実際、彼女はその短刀に手をつけようともしない。
トゥエンティシックスは代わりに手刀足刀を繰り出す。
僕は反射的に防御態勢をとる。僕も色々あって、殴られたり蹴られたりした事は多い。厚着をして、防寒具まで身に着けていれば、打撃は中々通らない事は知っている。だから……、
「痛い！　痛い！　なんで！？」
「ははっ♪」
……だけど、僕は苦悶の声を上げ、トゥエンティシックスは嗜虐の笑いを見せた。

昔、アニメイト高志店前で恐喝（カツアゲ）を受けた時も、こんなに痛くはなかった。実際、暴行に及んだ恐喝犯が「痛くない振りしてんじゃねーよ！」と苛立った程だ。

きちんと身を固めれば、耐えられるはず。まして、体格も体重も変わらぬ少女相手なら――という打算はまるで外れていた。痛くて痛くてたまらない。トゥエンティシックスの一手一足で、僕は骨が折れるかと思った。内出血で服の下が真っ赤になっている事は確実だろう。

「痛い痛い痛い痛い！　ねえ、やめてよ！　僕らには交渉の余地があると思うんだ！」

「お前ごときにそんなもの、あるわけないでしょ」

トゥエンティシックスの足刀が僕の腹にめり込んだ。最早、僕は立っていられない。

その時、硬質な少女の声が届く。

「トミヤマ・ナカミチっ、……トゥエンティシックス？！」

サーティエイトだった。かろうじて目を向けると、こちらに駆け付けようとしている。彼女もまたヴァイタルウェアのみ――動き易さを優先して、他を脱いだのだろう。

――よ、よし、計算通り！　一応！

大声で泣き叫んだのはこのためだ（痛いのも事実だったが！）。

これで数の上では二対一……！（僕が数に入るか否かは別として！）。

だが、トゥエンティシックスもサーティエイトを一瞥すると、にやりと笑う。

そして、一瞬僕に背を向けたかと思うと、そのまま体を捻って……。

――上段後ろ回し蹴り？

に思えたが違う。トゥエンティシックスなら、こういう時、必ず頭に踵を当ててくる。そんな凄まじい身体と技量と冷酷さを兼ね備えている。だが、今回高く長く伸びた少女の美脚は、鞭のようにしなり、僕の首に絡みつく。

「ぐっ……！」

僕はそのまま倒された。投げ技だったらしい。こんな時なのに顔に触れる太腿が気持ちよくて、情けない。しかも、僕の身体は完全に固められた。多分、柔道とかの人体工学に基づいた固め技だったのだが、素人の僕に全体像が見えなかった。ただ、身体が動かなくなり、下手に動こうとすると激痛が走る。

その上で、トゥエンティシックスは初めて短刀を抜く。

「動くな……！」

トゥエンティシックスの一言でサーティエイトは動きを止めた。人質――なのだろう。

僕を素手で殺せるトゥエンティシックスが刃物を使う理由は他にない。

トゥエンティシックスは、僕の首に短刀を突きつけ、ケラケラと笑う。

「こんな男のどこがいいのやら」

そして、彼女は乳房を押し付けて、股間に脚を割り入れてきた。

「ふん。どうせ、これで興奮しているんでしょ。残念だったわね。サーティエイト、この男は私の身体がいいってさ」

嬲られているのだろう。というよりも、嬲られていたのだ。連打が収まって、ようやくわかった。最後の一撃を除いて、彼女は僕の体幹を避けていていた。最初から、サーティエイトを誘き寄せるための餌だったに違いない。

悔しくなかったと言えば、嘘になる。

しかし、それはそれとして、僕の頭の冷えたところが、ふと気付かせた。

トゥエンティシックスは、僕ではなくサーティエイトに、見せつけるように振る舞っている。

だから、僕はなんとか口を動かす。

「き、君さ、やっぱり、サーティエイトの事が好きなの？」

「な……！」

その瞬間、トゥエンティシックスの顔は真っ赤になった。あれだけの動きを見せても、息一つ乱さず、裸を見られても、まるで動じなかったトゥエンティシックスが、である。サーティエイトへの恋心を指摘された瞬間、羞恥にその身を染めたのだ。

――マジかよ。カマかけもいいところだったのに……

「いやさ、ずっと気になっていたんだ。姉を尊ぶ【マリオン】なのに、サーティエイトは君にだけ呼び捨てタメ口でしょ？　生意気な個体ならともかく、サーティエイトみたいに従順な娘が何で――って、昨日聞いたら、幼い頃は**一番の仲良し**だったからって……」

あと、悪い虫というのも、今思うと意味深な発言である。

「だ……だだ……」

「けど、ある時期から、君はサーティエイトに対してそっけなくなった。それでも習慣で呼び捨てタメ口が続いているらしいけど……君が急にそっけなくなったのって、サーティエイトを本格的に**意識**し始めたからでしょ？　だから昔みたいに無邪気には……」

「だ、黙れっ！！」

トゥエンティシックスは大きく短刀を振りかぶる。

突きつけていたのだから、振りかぶる必要はないのに。

その隙をサーティエイトは見逃さなかった。

飛矢を思わせる飛び蹴り――トゥエンティシックスは自身も使った『水平錐揉み回転両足蹴り』を顔面に直撃させられ、一撃で昏倒した。

＊＊＊

サーティエイトはすぐにトゥエンティシックスの短刀を奪い、逆に首元へ突き付ける。僕は僕で急いでトゥエンティシックスを縛り上げる。が、僕は縄術（ロープワーク）が苦手で、どうしても時間がかかってしまった。途中でトゥエンティシックが目を覚ましたぐらいだ。しかし、サーティエイトが突き付けている短刀の前に、トゥエンティシックスは抵抗せず、沈黙を続けたのだった。

「終わったー」

「お疲れ様です」

一息つく僕を、労うサーティエイト。だが、彼女はトゥエンティシックスから、短刀を離そうとしない。

だから、トゥエンティシックスの顔は引き締まったままだ。

「……僕らの目的はあくまでも交渉だよ。相手の敵意を駆り立てるべきではない」

「しかし、譲歩に譲歩を重ねたところで、敬意を失い、敵意を募らせるのが世の常です。ここは我々の力を示しておくべきかと……」

「……君、結構マキャベリ好きだろ……」

西洋史に無知な僕からすると、マキャベリなんて、机上の空論で威勢のいい事を言って戦争に大負けしたＮＥＥＴなのだが……

「それに力を示すって具体的には？」

僕が尋ねると、サーティエイトは短刀の切っ先でトゥエンティシックスの豊かな乳房をツンツン突き始めた。

「強姦します」

「え？」

一瞬だった。トゥエンティシックスが顔を背けた隙に、サーティエイトはその切っ先で彼女のヴァイタルウェアを上から下へと引き裂く。伸び易く切れ難いヴァイタルウェアを一刀両断した。そんなサーティエイトの技量と短刀の品質に驚く暇はなかった。

トゥエンティシックスの真っ白な肌が露わになったからだ。しかも、その裸身を彼女は初めて恥じらい、身悶えている。というのにサーティエイトは短刀を離そうとはしない。下におろしたまま――トゥエンティシックスの下腹部に突き付けたまま、右へ左へと刃を揺らし続ける。

「私がこの女を陵辱し、蹂躙します」サーティエイトはトゥエンティシックスの血に濡れ

た唇を空手の指で撫でた。「肉体を弄び、純潔を奪う。これを以って見せしめとするのです」

トゥエンティシックスはそこで初めて乙女の声で鳴く。

「わ、私は負けたんだから。さ、サーティエイトの好きにすればいいじゃない……！」

「ふ、その強気がいつまで持ちますかね？　では、いい声で泣いて、私を愉しませてもら……」

「いやいやいやいや、そんな時間ないからねー」

僕はサーティエイトの細腕を掴み、無理矢理トゥエンティシックスと引き離した。